

川柳の雅証

麻生路郎★主宰



Pensoj fugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi **No.333**

二 月 號

昭和三十三年三月
創刊大正十三年通卷・三百卅三號
（每月一號）日發行



二月号目次

題 字……………麻生 路郎
表 紙……………米田三男之助

窓 口 談 義……………麻生 路郎(三)	川 柳「ヒロポン」……………北川 春樹(一〇)	あ る 日……………長野 文庫(四)	川 柳映画「柄 井 八右衛門」……………東野 大八(三)	川 柳と俳 句……………河村 日満(五)	新 川 柳鑑賞……………麻生 路郎(八)	辞書、辞典に現 われた川柳……………福田 丁路(六)	ふるさとのほ えみ……………富士野鞍馬(三)	江戸川柳に詠ま れた市川團十郎(一)	二 対 一……………阿達 義雄(四)	田舎に住めば……………吉田 水車(三)	私は売られている……………姫田 夕鐘(七)	本社師走川柳大会……………長野 文庫(六)	山陽新聞読者川柳大会……………(元)
近 作 柳 柳……………麻生路郎選(四)	川 柳 塔……………北川春樹選(四)	同 舟 近 詠……………麻生路郎選(四)	一 路 集「新婚」……………尼緑之助選(六)	各 地 柳 壇……………木下幽王選(七)	川 柳第二教室……………戸田 古方(三)	柳 界 展 望……………(九)	不朽洞会から……………(三五)	公 私 雑 記……………(三五)					

夜の曜土二第

本社二月句會

来会 歡迎

お互いに句會は休まないことにいたしました。

日 時……………二月十二日午後六時

会 場……………光明寺 大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前
(市電なら下寺町又ハ日本橋三電停下車)

兼 題……………「イニシャル」路郎選 二句 「金利」白柳子選 三句
「真 実」古方選 三句 「空腹」恒明選 三句

柳 話……………麻生路郎 句 評……………水谷 鮎美

会 費……………五〇円

川 柳 雜 誌 社 句 會 部

初代川柳句碑再建について

私達川柳人の始祖と仰ぐ初代川柳翁(柄井八右衛門)の塋城、東京都台東区浅草榮久町竜宝寺内の

木 枯 やあとで芽をふけ川柳

の句碑が去る大東亜戦争の戦禍で無慙にも煙滅しました。柳祖尊崇の具顯を如実に示したい私共は茲に諸賢と共に祖翁の句碑を再建し史蹟としての存在を社会に誇示すると共に川柳道の綱榮を燃望する次第であります。茲に各位の絶大な御助力を賜りたいと発起人連名を以てお願いいたします。

建設の場所……………浅草榮久町 竜宝寺内 建設の時期……………九月二十五日

予 算……………金参拾万円

賛助金額一口百円(幾口でも可)送金場所・東京都台東区北福衛町・台東区役所内句碑再建委員会・寄附者名簿は竜宝寺に納む。予算額は句碑建設費並びに除幕式其他一切を含む。昭和三十年一月

句碑再建委員会委員……………村田周魚・川上三太郎・前田雀郎・西島〇丸・塚越迷亭・坂下也奈貴・岸本水府・川村伊知呂・楊元紋太・中島生々庵・麻生路郎外數十氏

窓 口 談 義

麻 生 路 郎



選挙

国会が近く解散する。二月末には又選挙が行われるが、今度は街から街へ名前を売つて歩かないことになつたのは有難い。幾ら叫んでも、名前を聞かされただけで投票しようとは思わない。御都合主義の選挙法改正にしても雑音で仕事の妨害をされるよりはマシである。

党に投票するのがホントであるが、ホントに国民の味方になる党がないと云うことが私たちを常にユウウツにする。社会党がモ少しシツカリしていれば問題はないのであるが、いつも思わされる。

意地ツぱりまだ／＼別居続
きそう

主義主張が違ふのであれば、左派だの右派だのと云わず、たとえ小教でもハツキリした党を作つて、それを伸ばすのに懸命になつてもらいたい。今のような社会党では名は社会党でも、社会党でも何んでもない。そうなるとムダと知つても人物本位と云うことにな

るが、自分の選挙区に人物らしい人物がいなくて白票を投ずるより方法がないことになる。なさけない話である。

公明選挙運動が行われているが、何処まで公明選挙が行われるか疑わしい。選挙費用にしても公明選挙運動費にしても、みんな国民の肩にかかつて来る負担であるのに、そんなことを考えないで、税金を痛がるのはコケの沙汰である。

「硯滴」と「天声人語」

毎日新聞の「硯滴」や朝日新聞の「天声人語」のことに少し触れて見たい。終戦直後の「硯滴」は読むに堪えなかつた。「天声人語」は「人声人語」だつた。街学的で、鼻持ちならぬ記事が多かつた。時にはシツポをつかまれて訂正したりしていた。「硯滴」にしても「天声人語」にしてもビリツとさせるところに生命があることは私が云うまでもないが、それがなくなつて、ただダラ／＼と念仏を称えていたのに過ぎなかつた。近來よほどよくなつたが、このダラ／＼は今でも続いている。釈瓢斎などが筆を執つていた頃から見ると、長きに於て倍以上になつて

いる。これでは生温るくならざるを得ないのではないか。詳しくは考へべしである。しかし近ごろ、「硯滴」や「天声人語」の筆者が非常に常識的になつたこと、筆に人情味が出て来たことは注目し値いする。一月十八日の朝日の「天声人語」と毎日の「硯滴」とは期せずして第十伸洋丸の事件を扱っているが、共にあたたかい気持ちで筆を執つているので特に好感が持てる。

死刑

死刑は絶対にいかんと云う説があるが、どうかと思う。本人が希望もしていないのに、ハガキ一枚で呼び出して、大量に殺すのも、見様によつては死刑にされたようなもので、コレハ絶対にいけないが、世の中には死刑に処した方がムシロいいのではないかと思えるような人間の存在することも否定出来ないような気がする。ような気がすると云うのは同じ悪事をした人間でも、時代によつてそれが死刑にされている場合とムシロ英雄視されている場合があるからハツキリ云い切れないのである。一人の人間が計画的に一人の人間を殺しても死刑になつている場合は

ある。一人の人間が数人の人間の生命を奪つても死刑になつていない場合がある。時には無罪にさえなつてゐる。私は時々そうしたムジンを凝視して公憤を感じるのである。人命の尊いことは知りすぎるほど知つてゐる。人権尊重まことに結構ではあるが、殺された方の人権尊重はどうなるのであらうと考え込まざるを得ないのである。自動車の運転手が殺された場合、殺した方が殆んど死刑になつていないと云うことである。

ヒロポン患者が人を殺した場合、心身衰耗者として殆んど無罪になつてゐる。私は敢てこの心身衰耗者を死刑にせよとは云わないが、この患者の手を借りて殺人をさせてゐる薩の人を探し出して死刑にする方法がとれないものかと思ふ。彼等は決して心身衰耗者ではなく、しかも彼等自身何等手を下さずに、幾千幾万の人間を殺し、同時にその遺家族を悲劇の世界へ逐いやつてゐるのである。

そうした人間を死刑にすることすら死刑は絶対にいけないのであらうか。常に飯の上の蠅を追うてゐるような法の微力さを感じる時私は公憤を禁じ得ない。



平塚市 木村 孤浪

外套が左前だけ女也

おかんばせビューテイスボットおかしがり

職場中なで切りにするニューカメラ

あつちにも姪こつちにも姪の忙しさ

ボーナスも特選賣場に近づけず

豊中市 戸田 古方

我が家という門灯がながめられ

盲従の癖まで上品だといわれ

傍聴の方がはら／＼しはじめ

尼崎市 水谷 鮎美

思い出し笑い晩酌いゝ機嫌

大阪市 市場 没食子

新任の功名心は和を忘れ

呑めと言えば呑むと長男もう十九

ホノルル市 内藤 草一郎

失業の眼にも花屋は美しい

ロマンスも金も残さず逝つたそな

人生の我は瀬を行き淵を行く

ヒス足でドアを蹴つて振り向かず

米子市 三鴨 三笑

なくくせに気軽な返事して帰り

ぐで／＼に酔うた世話する十二月

ものごとに角をたてゝる十二月

東京都 藤本 満年

悲しきは政治のネジが緩みおり

ワンマンのボタリ棒のように散り

果せないことばつかりで年を越し

剃りあとの青々として初日の出

注連飾り揺れるよデフレの風が吹く

布施市 吉田 水車

権利義務言うてる内に十二月

ひと様の發明ばかり感心し

大阪市 正本 水客

せつかな人の羽織と質屋知り

夜逃げしたこともうどんを食べながら

雪落ちる音旅の夜を深くする

悠々と猫が歩いてうらやまれ

花束を上げに一日がかりで来

池田市 黒川 紫香

娘が一人減つた火鉢をつゝいて見

身賣りする故郷は雪が一としきり

女事務休んで花がしをれて来

ライバルにコーヒよばれる羽目となり

大阪市 丸尾 潮花

若柳吉艶重の病床にて

迷信も信じ薬餌へ夢もなく

病今日少しよろしく和歌を詠み

着ぶくれていたら病人かと言われ

近松の筆は死なねば添えぬ恋

大阪市 北川 春巢

サンドマンの広告を見ず顔を見る

わたしやヒスですとつむじが曲りかけ

性は善小さな嘘へチト吃り

岡山県 浜田 久米雄

父がおるだけで茶の間の灯が明し

酒やめて気の弱い日がまだつづき

岡山県 逸見 灯竿

元旦の客大望を説いて去に

襟巻で顔をうすめた冬の恋

印刷でない恋人の年賀状

大阪市 武部 香林

宿替の車を犬は下りたがり

今犬があさつた塵箱を人あさり

往復を歩いて知事の親まれ

電停にペンキが匂うお正月

岡山県 大森 風来子

父ちゃんか寝て闇米を買わず済み

師の軸に替えて元日待つばかり

人並みに電報も来る十二月

砂丘にも生くる道あり虫の居て

鳥取市 杉谷 湖山

一人の波紋鯛にも及ばぬよ

横隊の娘の列を割る若さ

女また笑ろてごまかす術を持ち

兵庫県 小西 無鬼

尼崎市 小林 文月



ある時は蛙のようにバレーリーナ

大阪市 富岡 淡舟

影じつと動かぬ夜の淋しけれ

迂闊千万娘は恋をして居たり

妬きもせず妬かれもせずに四十過ぎ

お父さんお帰りと寝間から首をあげ

みゝす切るのも先祖代々

奈良県 飯降 白香

夕映へ恋人あるぞと叫びたく

出奔の夜汽車の窓へ灯がうるみ

山口県 長野 井蛙

正直な方と小馬鹿にした口調

長と名は付けど一人で掃除もし

金よこせのビラがデフレの風に鳴り

大阪市 太田 良子

倦怠期でしようね意地悪したくなり

既成品のあわぬサラリーマンであり

電話口呑んでいるとも云えぬなり

拗ねてみて脈のあるのを確かめる

翌朝に済まぬと一口言うただけ

岡山県 丸山 弓削 平

足音を立てぬボーイにあなどられ

慾張りと同じ手口で殺される

夫婦とも欺され喧嘩にも成らず

岡山県 直原 七面 山

体験でしよと恋愛論へ釘

タンポポの如く気安く手折られて

自殺者の度胸が欲しい十二月

パチンコ屋へ引返して乗遅れ

鶏縮める度胸は妻の方が持ち

川の字に土堤に寝るのも秋のこと

鳥取市 河村 日満

選挙違反やでとからこうて送り出し

全くのお久し振りには票はしき

待つ影も淋し灯ともし頃の雨

吾が社から出火段取りよく運び

十二月金が出るのがよう目立ち

道草を食う蟻もありほゝゑまし

見栄坊な僕だけ損をしてかえり

愛媛県 姫田 夕鐘

大根を貰いまつせと抜いてから

米を磨ぐ僕を児童に見詰められ

仲仕の真似してサロパス買いにやり

ビヤホールそのストープが懐かし

岡山県 福島 鉄児

血統を云うて士族をまだ意識

聞き合せ不仲の見える喋りよう

初日の出質屋の倉に遮ぎられ

初風呂へ今年は一入抱いてくる

元日の二号淋しく目を覚まし

大阪府 榎南 夏六

人妻となつても矢つ張りよく笑う

梵鐘のあきらめなさいと十二月

悔いがないとは吾が道の淋しけれ

岡山県 横部 牛歩

轉勤へ渾名やつぱりついて来る

晩酌へ女房デフレへ少し触れ

ぶらつけば近所が肺にしてしまひ

弱いへ妓面白がつて酌ぎ

岡山市 服部 十九平

集金という名目で妓来る

ただ酒を飲むなとうまい処世訓

母の愛父へ内証のことが増え

尾崎市 長谷川 三司

大学を出て三男は家出する

嘘を言う娘となり朝を化粧する

熊本県 有働 芳仙

三代の暖簾パチンコ屋に交り

未だ唄が出ないに酒の底が見え

高知市 大西 迷窓

新春の街サンドイツチマンも行く

内職の灯を消し新春を待つとする

大阪市 地俱 山風 楼

たまにする残業だから疑われ

広島県 山田 季賛

同窓会町長も居りボスも居り

ペンダコの出来た女房と共稼ぎ

給料日別な恋する二十歳代

大阪市 山本 葉光

自動車の奔流ポスト迄を待ち

諦めて個性を殺し養われ

倉敷市 木村 千容

冗談も言わす洒落にも耳貸さず

ピース光新生目下バット党

倅に心も痺れ身もしびれ

もう少し生きろと背広できあがり

倉敷市 田垣 方大

急患へ医院の詣まだ止まず

背ボタンと黒襟恋を争うて

支那そばへ夫のどてら羽織つて出

師走だというに養子は映画館

石川県 那谷 光郎

吉日を選ぶ暦に娘も坐り

他人の年齢訊いて訊かれて駅の隅

癪癪の明日まで待たず下駄をはき

折詰を屋台で飲んで忘れて来

大阪市 木村 水堂

親類も養子になつて疎遠がち

洗濯機喋る時間がふえただけ

やりくりを妻にまかせてパチンコ屋

熊本市 楠田 英子

和服着て師走の街を歩いてき

叫びたいのに雲悠然と走り

淋しさにたえずお便りかきつづけ

高槻市 福田 丁路

差引券のボーナスに判を捺し

傾いた月に不気味なガスタンク

その筋と知れる目つきのハンチング

倉敷市 水谷 谷水

望ちた娘のおかげ不自由せずすみ

給料の完配恩にきせられる

あんたかて後家やないのと酔うている

十二月誰か故郷を思わざる

税務署へ後家先頭にたつて行く

生きているわけでもないに後妻妬き

道たてゝなぜか淋しい未亡人

哀れとや朱塗りの様な老妓来る

倉敷市 相原 一善

案の定旦那機嫌を取りに来た

道楽の二号の店がはやること

ジロリツとにらんだだけで泣きやむ子

女もう闇から闇へ葬むる気

岡山市 岡田 夜潮

盗人猫吃つてる間に逃げ失せる

ボーナスの空いた袋を妻捨てす

ボーナスを軍手外して頂戴し

一泊でいろりの味を満喫し

朝露に濡れても滞納だけはせず

岡山市 岡村 牛耕

娘の下宿両手に提げて母が来る

星のバー蜜柑の皮を踏みつける

漬物へ糠がついとる倦怠期

返事などしては居れない子沢山

岡山市 本田 恵二朗

失意けう科学万能力やになり

対策の一ツへ青酸加里も入れ

奥さんを褒めたらあんじようのろけられ

大阪市 真鍋 一瓢

円以下の切捨てにさえ腹を立て

細長うちの息子も伸びている

居酒屋に出来た支店を祝うて来

禿悲し貯めてるなどと疑われ

京都市 松川 杜的

パットとは知らずに惚れた胸の線

棧橋でともかくNOIを撮り

大阪市 永田 六龍子

喜びを包み切れない今朝の紅

商談へ吞めたらと思ふ酒嫌い

鳥取市 森本 法泉子

忘年会すき焼にまで切り下げる

用事だけ言つて帰るも年のせい

米子市 北条 文郷

絵葉書の街放射能知らぬよう

現実にはゴジラも出ねば金も出す

大阪市 尾野 おさむ

肉塊の意識生みたくない女

足許をみる冷酷な顔になり

大阪市 飲島 二桂

残業く骨体美見せて

大阪市 岩島 雄歩

デフレでももう呑む話十二月

大阪市 後藤 梅志

空き腹で師匠の諍熱があり

月給が上つたことを言いそびれ

この中に時計が一つあれば足り

大阪府 小池 しげお

鶴の二羽松のみどりをひきたたせ

賛成をしたのか無口ついでいき



キツスして帰れば妻が起きて居り

倉敷市 松村 萬古

首を切るつもりか表彰取り急ぎ

商談へサービスガール塗り直し

吊革へ子をぶらさげて嬉しがり

基仇が来て寢室にしてくれず

倉敷市 藤井 春日

デパートに欲しい娘も居る役所

悪友をそれて靴へ牛の肉

もう家が建ちまつしやろとおだてられ

大阪市 木口 賀峰

引越の時に出来た鉄兜

岡山市 岡本 緑風子

うつぶんを丸出しにして投書欄

勇退と言われ顔首とも云われ

駈落ちへ父親血筋だなどと思ひ

記者團へ落目と見られとうない談話

岡山市 津田 麦太楼

賃扱が去んで淋しい路次になり

モーニング菊のバツヂを忘れまい

中ヒール穿いた遠出の妓と出合い

米子市 小西 雄々

ストープを囲み賞与のでぬ話

後悔を相談欄で念を押し

岡山市 浜野 奇童

鳥取大砂丘に遊びて

大砂丘へ立つ人の何と小さき

本論にふれず集金よく喋り

堺市 高崎 雄声

重鎮の好み和服が好きと云う

口紅の濃さに母は気を遣ひ

岡山市 三枝 一策

振られねばよいがと思ふたら振られ

睦言を子供に全つきり聞かれ

山添いは積つたやろなと炬燵

大阪市 森 文夫

アルサロのマツチ貯めてる青春期

醋寒を女と生れ米をとぐ

岡山市 小原 宇柳

再婚の話へミシン振り向かず

逢えそうな予感がしますお月様

晩酌を止めて進学さすと決め

鳥取県 藤井 明朗

子等の留守猫背のびした安堵

新調づくめ月賦を着て歩き

岡山市 永松 東岸子

餌代がたまっているとは鶏知らず

一生のねがいが村会議員とは

倉敷市 野田 素身郎

共稼の条件女の方がつけ

何を言いたいか酒のみたいという娘

死んでやるからと強迫じみた媚

倉敷市 安原 斜木

靴磨き聞けば吾が子と同じ歳

賢妻と死んでわかつた貯金帳

倉敷市 矢吹 日出雄

寒風へ生きんがための蘭草植え

吹田市 菊田 いさむ

寝つかれぬはす盛り場の裏の宿

やまかんが当りクイズの金貰い

忙しいからと素顔で見送られ

住めば都と草分けに教えられ

神戸市 岩田 一夜

真ん中へ乗つてね朝を送り出し

夕焼けの街へ夜勤の弁当さげ

尼崎市 中塚 夢生

早替りの様に女をする気替

汽車降りてからカツギ屋の顔になり

大阪市 節間 杏花

特価品女若さを捨てて撰り

のど佛突き出して金借りに来る

駈け引きも知つて女のやわらかし

不惑とは昔むかしの事なりき

こんな靴でも磨かして呉れと言ひ

西宮市 永藤 彌平

けつまずき／＼長生だけの裏長屋

傷心は吹雪に一人埋れたし

大阪市 神谷 凡九郎

本当本当本当だがなあんた好き

ふと酒のにがさも知つて社用族

兄さんと思ひまへんと毒づかれ

大阪市 清水 望峯

空つばの袖を会社は振りつゞけ

宣伝の風船もろて礼を云ひ



新川柳鑑賞

— 承 前 —

麻生路郎

父親は只居るだけの看護
なり (淡舟)

「一寸姿ですわ。」と子どもの
手を握っている。

「……………」

「それに熱もだいぶあります
わ」

「そうか」

「一寸見て、頂戴。お医者さ
んへ一ト走り行つて来るわ」

会社を休んだ父親は、子ど
もの枕許へ、どつかり坐り込
んで、新聞を読んだり、タバ
コをスバ／＼喫っている。そ
れでも看護のつもりなのであ
る。世の父親の半面をつかん
でいる。

神経が太い妻なり戸も締
めず (いわを)

「大丈夫ですよ。何も盗られ
るものはないし」と戸締りも

しないて寝ると云う妻の神経
の太さにあきれた男の心境を
巧くキヤツチした句である。
娘の時にはかよいわい女性に見
えても、一たん人妻となると
案外気強い女になる女性もい
るものである。面白い句であ
る。

建仁寺

八百年の庭へボールが打
込まれ (草右)

建仁寺垣で名のある京の建
仁寺を詠んだ写生句である。

八百年の歴史のある寺の庭
も、時代が変わると野球のボー
ルが打ち込まれる。静寂であ
るべき古寺も時の力には抗す
ることの出来ないことをこの
句に描出したのである。一つ
の発見か。

三度目のそれ見なさいへ

折れておき (迷窓)

しつかり者の妻を持つた男
の心境を巧くとらえている。
何んかと云えば夫のすること
に口ばしを入れる。それが不
思議と妻の意見の通りにな
る。「それ御覧、だから云わ
んことではないわ」
と度々やられる。三度目と云
うのはたび／＼の同義語であ
る。

宿命が男のクスを養う身

(谷水)

失業をよいことにして、競
馬や競輪を追いかける。それ
がなければ、麻雀やパチンコ
へ入りびたりである。それで
も連れ添う夫には違いない。
ジツと手をつかねていれば人
間の乾物が出来るので、飲み
屋の女で僅かな金をつかんで

来るが、暮しは決して楽で
はない。それを宿命として甘
受しているのも妻なればこそ
であろう。斯う云つた環境の
女を詠んだのがこの句であ
る。

洗濯機今年も話だけで暮
れ (文夫)

洗濯機は主婦の夢である。
デパートへ行く度にのぞいて
見る洗濯機ではあるが、安サ
ラリの生活ではなか／＼手が
出ない。ボーナスがタンマリ
貰えたら、買つてもいいと云
う夫の許しはあつたが、その
ボーナスも、のつびきならぬ
ものに皆んな出てしまつて、
洗濯機どころではなかつたの
である。家庭川柳として面白
い句である。

浪曲的人情論さと取りあ
わず (あきら)

「あいつも心からの悪人では
ありません。永いことわする
うた女房に死なれ、赤ン坊を
抱えて、困つた拳句なんで
す。決してだます気ではなか
つたのです。」

「だます気でもなくても、結果
がだましたことになつての
だ。サツサと立退いてもらい

たい。あんたも、いくら友達
でも、いつまでも、そんなこ
とにかゝわつてゐる必要もな
いだらう。」

「それでは人情がかけます」
「そんな人情は浪曲的人情だ
よ。私の世界では通用しない
からな。私は法の力ででも立
退かして見せるよ」と云うよ
うなところを詠んだもので、
複雑な内容をうまくまとめて
いる。浪曲的人情論と云う辞
餉も箇切れがいい。

停年も近くちぎつた煙草
喫う (澄泉)

停年近い人の淋しい生活
を詠んだ句である。前途の暗
さが思いやられる。「ちぎつ
た煙草喫う」と云う巧みな表
現がこの句の生命である。辞
餉の使い方が、いかにその句
を生かすかと云う好適例であ
る。苦心は決してムダではな
い。

人間が眞つ正直ですぐ怒
り (水車)

自分が正直だと、他人の一
寸した不正直でも仮借しない
のが人間性だと云えよう。自
分は正直だが、他人の不正直
に對しては、すこぶる寛大で

あることは聖人でなければ出来ないからである。この句からはそうした人間性を掴み出して見せられた気がする。単純な表現であるが、「すぐ怒り」で句が生きている。

税吏来て猫にさかなを食

われたり (摩天郎)

税吏が来る。食事中ですからと待たしておくことも出来ない。アタフタと飛んで出て迎える。少しでも御機嫌を損じまいとする心づかいが、この句からうかがえる。

ドモリながら、一応のうけこたえをする。税吏が帰つてゆく。ヤレ／＼と思つて、台所へ引きかえしたら猫がさかなを失敬していたと云うのである。そこには笑えない滑稽な場面が展開されている。面白い写生句である。

療養所汽車から見れば

とところ (法泉子)

山の小高いところに、幾棟かの平家が建ち並んでいる。空は蒼々として一片の雲もない。山裾にはさく流れがあつて、道行く人の姿が逆さに映つて、ユラ／＼と揺れている。これが汽車から眺めた療

養所の姿である。

毎日の生活に追われている人達が車窓から見れば、こんなところで一日でも二日でも暮らして見たいと思うのも無理がないであろう。軽い穿ちの句である。

戀人がいるのに嫁けへん

か／＼ (ひさみ)

作家自身の実感をありのまゝに詠んだものであろう。この作家ぐらい女を裸にして見せてくれる作家は稀れである。表現も実に軽い。この句

など無技巧の技巧の域に達したものだ云えよう。恋人があるのにでなく、いるのにと詠んだ突つ込み方など心にくいほどに表現上のコツをのみこんでいる。恋人がすぐ眼の前にいるのに、それと気づかず、ゆけへんか／＼と曇み齟で、再婚をすゝめているユ

ーモラスな情景が躍動している。この場合、女が薄笑いをもつて応えているさまが想像されるので再婚をすゝめられているものと観たのである。

パンガローへ来ても女は洗濯し

洗濯し (竹莊)

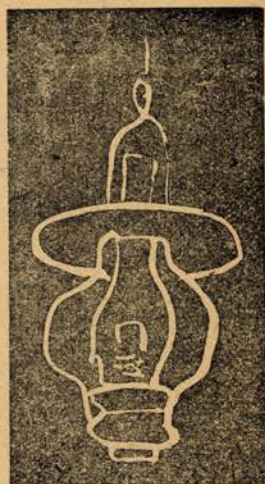
山は招くだとか、島は詩の国夢の国だとか。アベックで来たパンガロー。一寸汗ばんだのと女はハンカチの洗濯をはじめ。天気よさが洗濯をしなければならなくなる女性心理を巧みにとらえている。この句の場合、「洗濯し」と「し」止めの表現は少しく低調である。

柳界展望

▼本社二月份句会は二月十二日(土)午後六時から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催される▼川維阿倍野支部新春川柳会(大阪市)は一月二十日午後五時半から西光寺で開催▼南区医師会杏林川柳会の新年句会(一月十八日午後七時半から生々庵居で開催)▼南海電鉄川柳会新年句会(一月十七日午後六時から粉浜親和寮で開催)▼中島生々庵・北川春葉新田理事長の交迭披露懇親会は一月九日午後六時からアベノ松崎町三「大万」で開催▼岩崎愛二氏始め多数出席余興統出盛會裡に散會。以上何れも路郎主幹出席▼川維淀川支部句会(大阪市)は二月九日午後六時から東淀川区三津屋北通四ノ二九武部香林居で句会開催兼題「節分」「口」「手」の三題▼川維玉造支部(大

阪市)は一月六日午後二時から白柳子居で第一句会を開催同月二十日午後六時から同居で第二句会開催▼川維池田支部(大阪市)は阪急川柳会と共催で一月十七日午後六時から梅田阪急本社議室で開催▼川維堺支部では今回堺市長大塚正氏から市長盃の寄贈があつたので一月十九日午後六時から摩天郎居で第一回堺市長杯獲得句会を開催、カッパ授与に堺市から家路秘書係長来会、市文化のため斯道の激励があつた▼大阪市交通局川柳会は一月十九日午後五時から同院サニールームで新春句会開催▼33川柳会(堺市)は一月十三日午後五時半から堺市島野工業KK會議室で新春句会開催なお「川柳雑誌」二月号の通巻三百三十三号と同川柳会名称333と号数一致につき同会は二月二十日午後一時から本社路郎師を聘し堺労働会館で大会を開催する▼川維出雲支部(出雲市)は本年が支部設置してから三十周年に相当するので目下種々企画中の由、なお十二月十三日の忘年句会(名物いずもそばと酒肴を以て飲談新年への躍進と会員の倍加運動を約し懇談楽しき集いであつた由)▼川維備前支部(岡山県)は十二月十八日夜櫻句案居で忘年会を開催▼川維赤坂支部(岡山県)は十八日午後六時から千流居で十二月例会開催優勝杯は光好三四詩氏獲得▼川維岡山市内グループは十二月二十一日夜忘年句会を日赤支部で開催▼三井造船川柳会(玉野市)は十二月二十四日夜組合事務所忘年句会開催▼広島川柳会は十二月十五日午後六時からつるや食堂で忘年句会開催▼川維岡山支部一月句会が一月九日山陽旅館で開催された▼川維鳥取支部新年句会(一月九日)に開催され米子市から三嶋美笑氏が参会した▼広島川柳会は一月九日に広島教育会館で新春交歓川柳大会を開催▼川維赤坂支部(岡山県)新年句会を一月三日午後六時から大介居で開催第十三回優勝杯は難波舟桑氏獲得▼かがみ川柳会(岡山県)新春句会が一月九日鏡野町役場で開催▼川柳雑誌社米子支部(米子市)道笑町一ノ三四が一月に結成され支部長に三嶋美笑氏が就任された。同地方の読者の参加をおすすめしたい。なお支部句報として「松露」が刊行される。▼富士野鞍馬氏は京都市東山区清水四丁目一七二へ転居▼松井恩案坊氏(奈良県)のたよりによると今回氏神社が道路拡張によつて移転改装となつたのを記念に昭和二十六年度の五条町の川柳大会の寄せ書「俺れに似よ」路郎師揮毫を扇額として奉納された▼吉原紅月氏(兵庫県)は目下療養中の由、病床から「食べて寝るだけの一日もて余し」の句信を寄せられた一日も早く全快を祈る。

(摩)



川柳「ヒロポン」

北川 春 巢

私は今晚「ヒロポン」の事をお話ししようと思ひまして、「川柳雑誌」や、手許にあつたプリントから句を拾ひ出して集めましたものを、お手許にお配りしたようなプリントにして見たのであります。

話は少し横道へそれますが、去る一日(十月)から「新聞週間」と云うのが一週間に亘つて行われたことは、皆様御存知の通りであります。新聞にもそのことをジャック／＼書き立てますし、ラジオのプログラムにもそれに関係したことを取入れて、座談会をやつたり、解説をしたりしておりました。私も忙しいものですから、それらを片々端から読んだり聴いたりしたわけではありませんが、一寸ラジオの座談会を耳にはさみしましたことで、「新聞は誰にも分るよう」に書かれなければならぬ。」と云う人があります。これは勿論必要なことでありますが、此の発言に対して又他の人が、「みんなに分るように新聞の記事を書いたら、くど

く／＼しくなつて、読むに耐えないものになつてしまふ。」と云う意味のことを云つておられました。それも確かであると思います。「川柳は常識なり」と云つて、常識人を以て任じている私自身も、恥しいながら、新聞を読んで分らぬ事が如何に多いか、ということ

を白状せざるを得ないのであります。失礼ながら皆様だつて五十歩百歩で、余り私とは違ふまいと思ひます。どの記事を読んでも理解が行く、と云う方は恐らく路郎先生以外にそう多くはなからうと思つております。

新聞記者は、自分で書いた記事に対して、「新聞の読み方十二章」と云うような本を書いて売つたり、又「新聞語辞典」と云うような本まで出来ております。川柳には「川柳語」がありますように、(「川柳」十月号参照)新聞には新聞語と云うものが自然に出て来て、それが日々作られつゝあるようであります。然し誰でも忙しい人が多いので「新聞の読み

方」を読んでから、又「新聞語辞典」を片手に持つて新聞を読むと云うような人も、そう多くはないと思ひます。そうしますと、自然新聞の読み方が表面的となり、同じ記事を読んでも、つい間違つた判断を下すようになるのではないかと思ひます。

ヒロポンも正直な所、私自身、余り縁がありませんでしたので、ただ新聞だけ見て、お手許のプリントの三面記事ポンのこわざも教えられ

ポン中の殺しが出たてで慌て出し
橋村 横寿喜
ヒロポンと聞いただけでもさうなり
丁路 橋村
位の知識しかなかったものであります。所が今夜皆様はヒロポンの事をお話ししようと思ひまして、ヒロポンに関する事を少々読み漁りましたおかげで、ヒロポンの知識も多少得たように思ひますので、それを受け売りしようと思ふのであります。

さてヒロポンと申しますのは、御承知の通り覚醒剤のことを一般にそう称しておるのであります。覚醒剤は又「覚醒アミン」とも云われておりますが、二種類ありまして、化学名は「プロバミン」と「メチルプロバミン」でヒロポンはメチルプロバミンに属するのであります。メチルプロバミンはヒロポン以外に、「ホスピタイン」「メチプロロン」その他色々の名前をつけて発売せられております。プロバミンの方は、「ゼドリン」が有名でその他「パーテン」「サンドルマン」等があります。これらの覚醒剤は、有名な長井博士が喘息薬「エフエドリン」の研究中、一八八七年一八九九年頃に合成されたもので、当時はまだその覚醒作用は分つておらず、その後一九一〇年頃になつて初めて薬理作用が研究され、一九三五年にアメリカで初めて臨床的に応用されて、発売されたのであります。覚醒剤の作用 人によつて個人差があるようですが、大体五

一五日程を内服しますと、三十分から三時間位の間に刺激効果が現われて参ります。薬の効能書によりますと、疲労感、不快感の消褪、気分爽快、幸福感、自信増加、闘志横溢、積極性増加、思考力判断力注意力の増加、多弁、等に記載せられております。がこれは薬屋の宣伝のために、余りにも美しい言葉で書かれてゐるようで、実際には気分爽快、快活、幸福感等と云うよりも、むしろ一種の緊張感、じつと落付いていられない焦燥感に似たもので、よい意味の自信増加闘志横溢と云うよりも、何か刺激を求め一寸したききばかりや挑発に挑んで行く気分が主なようです。注意力の増加と云うよりも、むしろ注意は一点に集中せず、長続きせず散漫となり、あれやこれやに手を出しても結局の所成績は上らず、仕事の量は増加するとしても質の低下は免がれない傾向があります。統一された思考力、冷静な判断力の増加、精神的作業能率の増進等はとても望めません。多弁になることは、これはよく認められております。覚醒剤の臨床的應用とその濫用 これら覚醒剤の病人への應用として、前にも申しましたように、一九三五年から、発作性睡眠、夜尿症、睡眠剤やアルコールの中毒、憂鬱症等に使われたのであります。これは病気の治療に必要欠くべからざる薬ではなく、従つ

てその当時は一般には余り知られていなかったものであります。

所が第二次世界大戦が始まりますと、事態は一変して参りました。我国でも昭和十六年（一九四一年）頃から覚醒剤が売出されるようになって来まして、私も此の頃鉄道の機関士に使つたので知つた位でありました。但し此の頃は主に錠剤で使用したので、それ程害はなかつたのかも知れませんが、又医者の方も、覚醒剤の長期運用による作用などは余り知らなかつたのでありまして、戦争が進展するにつれて、軍部や軍需産業資本家達は、国家のために、と云う美名のもとに、覚醒剤を悪用し始めました。例えば、連日連夜の戦闘のために疲れた航空隊、特攻隊、斬込隊夜間勤務の兵隊等に、睡眠を制限する目的で、命令を以て覚醒剤が与えられました。又それを服みますと、前述のように、何かじつとしておれない焦燥感も振立てられるので、一層便利でありました。現在、自分自ら注射して睡眠を制限し、麻痺にこるのとは隔世の感があります。麻痺のことでは、プリントの

ヒロボンの効き目バイ取る手が確か

の句は、此のへんの消息を詠んであるのであります。

さて話を又元へ戻しまして、銃後に於きましては、軍需産業の労働者微用工員達に覚醒剤が与えられました。如何に覚醒剤が濫用されたかは、覚醒剤製造の工場が二十社にも及んだことで分ると思います。薬品会社はこれで大変な利益を得たのであります。尚その上にも利益を貪ろうとして、戦後錠剤を注射剤に変えたのであります。医療の必要によつて注射剤が作られたと云うよりも、注射剤として売出した方が、より多くの利潤を確保し得ると云う、業者の必要上からと考えられます。かくて慢性覚醒剤中毒問題が起るきつかけが生じたのであります。

覚醒剤中毒者氾濫の実態 アルコールでもモヒ等の麻薬でも同じであります。覚醒剤を常習的に用いるようになりますと、自発的にはやめると云うことが出来なくなり、そのために身体の方も精神の方も障碍を起して参ります。麻薬の方には随分以前から「麻薬取締法」と云う法律がありまして、麻薬取扱者の免状のない人は取扱えないことになっておりましたが、覚醒剤もつい最近その害毒が認められまして、麻薬と同じように法律が生まれて、その免状のない人は、ただ持つてゐるだけでも罰せられることになりました。そうしますと今度は密造者が出来て来たわけでありまして。尤も密造者は以前からあることはあつたのですが、今度は殆ど密造者ばかりと云う状態になつたのであります。利

にさとい製薬会社が、医者の余り使わぬ此のような薬を、わざ／＼むつかしい手続をして迄は造らないようになつたからであります。さて話は元にかのぼります

が、覚醒剤中毒の患者が多数に発生し且つ蔓延した時期は、敗戦後の混乱から始ります。それは政治、経済、文化等の凡ての面におきまして露骨さを加えて来る反動的、好戦的な植民地的支配の時期であります。国民の生活は窮乏し失業者は増大し、外国軍事基地が強化されている時期であります。此のような社会環境の中におきましては、青少年の健康な精神的発展をどうして期待できましようか。勤労階級の労働意欲が、どうして盛り上り得ましようか。又健全な道徳感情が、どうして形成され得ましようか。医者は、こゝに覚醒剤と云う薬があり、又他方生れつき多少変質性を持つた人間が居て、その中毒になると云う事実の外に、此の社会環境と云うものを、中毒氾濫の原因であると見て居るのであります。これは又新聞を賑わしている、政界の汚職、疑獄、収賄その他無数の犯罪と同様、今日の腐敗した社会がうんだ必然的な産物であります。その点を谷水氏は、「終戦九年を迎え」と前書して

ボンの増殖までもしてくれたと詠み、雅万氏はその日暮しの政治ヒロボン流行

らせる

と詠んでいるのであります。新聞の表面だけを読んでいたのでは、こんな句は詠めるものではないと思ひます。

然らばどのような人々が、此の悪習に染んで行つたのでしょうか。最初は作家、芸能関係者、新聞記者のような職業の人々が、夜間の仕事をするために、内服及び注射液を使い始めたのであります。それは忽ちの中に街の愚れん隊、よたもん、パン／＼ガールと云うような人々の中に拡がつたのであります。これらの人々は親分乾分、義理、顔などの封建性のために、乾分は親分の命令により、弟分は兄貴分のすゝめによりまして、た易く此の悪習に染んで行つたのであります。一旦注射をしますと、それによつて起る精神作用は、これらの人々の気分にはマツチ致しました。威勢がよくなつたり、喧嘩早くなることは、彼等にとつて好都合でありました。それは昔の入墨のように流行し、所謂「顔をひろくする」ために、自己保身術の一つにさへなつたのであります。プリントにあります

ボンの増殖までもしてくれたと詠み、雅万氏はその日暮しの政治ヒロボン流行

者の階層も所謂、愚れん隊等の非生産的な階層から、労働者、農民、青少年、貧困家庭の主婦達の間にまで拡つて来ております。労働者の中でも、鉱山労働者、土建労働者、港灣労働者、拾い屋、掘り屋等に多いよう、夜間作業の一時の元気づけにやり始めたのが、やがては中毒に落入つて行くのであります。特に青少年層への拡がり方を見ますと、昭和二十八年上半年の違反少年一八三名中、十八歳二十歳の者が七〇九名（六三％）を占め、女子は一四一名（二二％）でありました。覚醒剤をこれら青少年が使用する動機につきましましては、友人のすゝめによつたもの二九％、好奇心から始めたもの二八％、その他四

日ごろの疲れ……
そんなのないよ
疲労はメタボリンで
毎日解消してらるぞ！

疲労回復・脚氣に
強力メタボリン
錠 注 無痛注

三%となつており、青少年達は「頭がよくなる薬だ」と云つてすゝめられる場合が多い、と云うこととであります。

ヒロポンが大都市から農漁村へ波及します場合に、都会から中毒を持つて帰る、プリントにありま

す紅月氏の

ヒロポンとやらを都会でおぼえて来

と云うような場合も勿論ありますが、もう一つは前に述べました、軍事基地の果す役割も大きなものがあるのであります。外国兵とそれに群るバン／＼、キャバレー、魔窟これらが基地の周囲の青少年に与える心理的影響は見逃せないものであります。新井博士は次のように講演しておられます。即ち「……この一例として九十九里浜基地とその周辺の農漁村がありま

す。先ず中毒は初めに基地での現象であります。慢性中毒になると労働が出来なくなる所から、注射液の買入れに困難となつた中毒者グループは、恐喝、傷害、暴行等をもつて周囲に働きかけ、注射液の財源を稼ぐようになり、これもそう確実なものでないので、中毒者グループは自ら販売者となつて、基地周辺の比較的豊かな家庭の青少年をグループに巻き込み、これに注射液を売りつけて財源を確保して行く、と云うことになりま

す。プリントにありますが、南風郎氏の犯罪のもとにはヒロポン代紋し

の句の意味もこれで分りますし、又前述谷水氏の句の前書「終戦九年を迎え」も一層よく意味が分つて参ります。此の句を抜かれた路郎先生の、博識に対し、敬意を表する次第であります。

とに角中毒者グループは、自分の注射液財源確保のために、新しい中毒者を抱き込み、雪だるま式に大きくなつて行くのであります。これが今日覚醒剤中毒者が増

同舟近詠

忠孝をやゝこしく言う学問し
風邪声をいたわる方も咳をして
容体を耳診断で売薬屋
怒りなど知らず泉はいつも澄み

長野県 高峰 柳 兄

見合い等引け目をとらぬ場数踏み
参観日甘えたい子の眼と出合い
寝押して逢う約束へ意気込めり

加して行く場合の法則であります。さて一旦覚醒剤の注射を始めますと、多弁になり、じつとしておれなくなり、女の子にも気易く物が云えるようになり、威勢がよくなり、タンカも切り易くなり、愚れん隊等では注射がやめられなくなるのであります。又労働者、試験勉強の学生等は、疲労感を忘れ、眠くもならずしますので

（血液）が逆流して来ますね、あれは何とも云えねーい、気持だなー。」と述懐している状態になるのであります。

密造ヒロポンは一罎中に三、五、七、九位で売買されておるそうですが、中毒者はそれを一日七十、百本、或はそれ以上うつのであります。ボン代は益々嵩まつて来

すので、学生服や家の道具を質入れ、ボン代を賭けて徹夜で花札をするようになり、恐喝、暴行、傷害更には強盗となつてボン代を稼ぐうちに、愚れん隊よたもんの中に頓落してしまひます。プリントにありますが橋村氏の

え

パチンコで儲けヒロポン代に消

すので、学生服や家の道具を質入れ、ボン代を賭けて徹夜で花札をするようになり、恐喝、暴行、傷害更には強盗となつてボン代を稼ぐうちに、愚れん隊よたもんの中に頓落してしまひます。プリントにありますが橋村氏の

の句のように、パチンコで儲けたのをボン代にする位は、まだ／＼よい方と云えましよう。こうなりますと、そのグループそのものが、その個人に中毒を克服しようとする氣持を起さなくなり、たとえ個人が心を持ち直そうとしても、それを邪魔するのであります。プリントの

勿体なやヒロポン位で身を亡しと云えます。又プリントの、ボン中の更生今や模範工

圭 水

精神症状には色々な型がありま

の句などは、特殊の場合の句であると思ひます。

川柳家の家庭にはこんなことはないと思ひますが、若し青少年で、今迄よく勉強していたのが急にしくなつて、そわ／＼落付き

がなくなつたり、仕事をおつぱり出して後を顧みなくなつたり、と

に角今迄と違つた様子が見えて来

ました場合には、市内各保健所内に「ヒロポン相談室」と云うのが

新しく出来ましたから、相談される必要があると思ひます。

さて最後にボン中の精神症状に就て、簡単に申し上げます。精神症状は一口に云いますと、今迄原因不明だとされていた精神分裂症と非常によく似ております。それで、これによつて、精神分裂症の研究に一つの手掛りが得られるのではないかと考えられておる位であります。然し精神症状も個人によつて、多少違ふのであります。又症状の現われる時期も、個人によつて色々であります。一日二十本位で、一、二ヶ月に出て来る者もあり、又相当量を一年二年とやつていても、出て来ないものもあります。又注射をやつてゐる間は出て来ずに、注射を止めて数ヶ月後に初めて出て来る者もあります。

精神症状には色々な型がありま

「或る若い土工は飯場において、いつも仲間の態度が気になった。何か皆が自分のことを注意し、除け者にしている。その中に、あいつは怪しいからやつつけろ、と云う声が聞えて来た。夜電燈を消してから、皆がいつ迄も何かそこそ自分のことを云っている。その中仲間の一人が企みの中心人物で、皆を使つて自分を狙つてゐるように思われて来た。とうとう一度その男に面と向つて、そんなに俺が嫌いなら相対で勝負をしよう、といったが、相手は何の事か分らぬような顔をしていた。いつやられるか分らないので、ドスを用意した。或る晩、どうも気がおかしい。部屋の外から覗いてゐる奴がいると思つて、いきなり戸を開けたが、誰もいなかった。寝てから、例の男を中心に、何かしめし合せてゐる。今度はやられると思つた。相手は寝巻を着ないで作業服で、ドスを持つて蒲団の中で、こつちをうかゞつてゐると思つた。とうとう、先手を打つてやれ、と勝手知つた相手の寢床にとびかゝり、一気に胸を突き刺した。殺された男は、はだかによく眠つていたのであつた。」

まず、第一の類躁状態と云うのもよく見る型でありまして、落付きなく、注意散乱し、早口でどまるところを知らぬ冗舌、身振手振よろしく、表情の変化も豊かに、話題は次から次へと移つて、主題を見失ふと云う状態です。室内に一人居りますと、大声で歌を歌い、動き廻り、呼びかければ直に応じる。然しそれ程感情爽快と云つたものはなく、何か不安でイラ／＼と落付かない様子であります。此のような、向う見ずの前後をわきまぬ状況は、又犯罪を犯し易い状態でもあります。昨年、皆様の御記憶にもあると思いますが、作家三島由紀夫氏の宅へ押入つて恐喝し、金を取り損つて衣類などつまらぬ物を奪つて逃走した人物のことが、新聞にも出ましたが、この人物が犯行当時丁度此のような状態にあつたと云う事を、松沢病院の林博士が鑑定しておられるのであります。

意志の面の障壁では、茫然として無気力、格別の要求希望もなく、たゞぼんやりと病室に坐つたまゝである。と云う型と、意識混濁を来してうわごとを云う、と云うような二つの型がありますが、後者は少いと云うことであります。さて覚醒剤中毒の患者は、病院に入院させ覚醒剤を断ち、一ヶ月から六ヶ月もしますと凡て症状は或る一定の所に固定して参ります。麻薬中毒では、麻薬が切れた時の禁断症状が非常に苦しくて、そのために死ぬような場合もあると云うてありますが、覚醒剤の場合では、それ程苦しむ症状はないとのことであります。半年程入院して、精神症状が全快し、又は軽快した者を退院させますと、必ず又覚醒剤の注射を始めます。麻薬中毒の患者は医師の前では「今後絶対に致しません」と真剣な表情をして退院をせがむのが常であります。ボン中の方は、「又やりますよ。」と平気で云います。又たまには「もうやりません。」と云うのがありますが、傍から「嘘つけ!」とからかわれてゐる状態でもあります。こう云う兄弟が家に居れば、嫌も来ず、嫌にも行けぬと云えましよう。グリン

御静聴、有難うございました。(十月本社句会の講演より)

川柳はカツバである

増本翠露

五・七・五の短い体軀にヒュマニズムを盛り、ちくりちくりと痛烈な批判の言葉を投げる川柳は、恰も小さな身体に洒落たこうらと頭にのせた皿の滑稽味が、峻烈な批判の眼をも親しく感じさせる不思議なカツバである。

現実を直視し、理想を追求し、過去の追憶に耽り、他人の振りを

し、亦わが振りを顧てその奇怪さに腹をかゝえて哄笑する——ほら、聴えるでしょう笑い声が——川柳は軽やかなカツバである。

一面淋しがりで、会う人毎に楽しいですと淵に引きずり込む。人なつこくちよつぱりいたずらものだが、溺れた人々は組みつはぐれつ、われを忘れて川柳の醍醐味を味わう。川柳は素敵なカツバである。

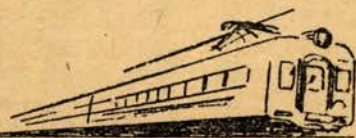
川のせうらぎが乾上り、村人が農耕をやめぬかぎり川柳は生きつゞける。カツバだもの。眼の前をびよんこびよんことうろつき廻つてゐるよう、捉えどころがない。川柳はカツバだもの。

大阪・名古屋・宇治山田を結ぶ 近鉄特急!

大阪—名古屋	2時間55分
大阪—宇治山田	2時間
名古屋—宇治山田	1時間42分

大阪上六発	7.40	8.40	11.40
	14.40	16.40	18.40
名古屋発	8.00	9.00	12.00
	15.00	17.00	19.00
宇治山田発	8.50	9.50	12.50
	15.50	17.50	19.50

座席指定特急券5日前から近鉄案内所で発売



近畿日本鉄道
大阪市天王寺区上本町六丁目

同

専門俳句誌のように、一寸やそつと、考えてみても判らぬ句と違つて、天声人語の飄音先生ではな
いが、「下手よ集れ」の句風にも
似ているこの俳句は、読めば解る

岡本 鳥石

新和英大辭典（昭和二十七年）



馬鹿話一人が立つとみんな立ち

たまに飲むだけの友情まだつき

水ばなをすゝり鳩山支持の弁

冗談のように税吏の智慧授け

見抜かれたように夕餉へ燭がつき

給料日だけを見送る妻となり

二次会を逃げてよかつた子の寝顔

ボケツトは金に縁なしゴミを溜め

あの様な恋がロミオとジュリエット

禁煙を誓つた筈の年も暮れ

禁酒してくれとは言わぬ妻の愚痴

首筋へ愛の口づけ受けて立ち

裏口へ廻つて留守とあきらめる

クジ買った顔とは見えぬア

ブラカードどうせつぶさ

うしろから順にPTA坐り

世界地図ようまあこに八千万

先客の柄がよかつた特賣場

句にも緋の裏付けてな

母親の虚栄を充す子の晴衣

悪筆に三拜九拜する署名

平和への努力水爆も実験し

年賀状出さぬところからばかり来る

名月へ金の話は止してくれ

一現も歓迎します金詰り

七転び八起きは人の事でした

同 木村 黙紅

同 穂北ベン郎

同 岡島 孤舟

同 野口卯之助

同 中林 進歩

同 土守トン坊

同 西本 保夫

同 多炭 若柳

同 福島 丁丙

同 福永 凡八

同 柿本 古竹

同 平山 港雨

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

同 齊藤 一蝶

僕一人笑つた声に赤くなり

本物の軸が素人に下手に見え

中年のお色気と服を着て出かけ

叱られに行く口紅を加減する

自らを欺く髪を切つて生き

二階借り靴ぶら下げて友が来る

病床の花枯れた頃見舞に来

つくねんとして禁煙の手のやり場

恐々の一人も交せて河豚を喰べ

あら熱があるわとキツス逃げら

冗談の様に首切りほのめかし

世話をやく口を皆んなが煙たがり

心中などせずに越せたを目出度

愛よりも金がと思う十二月

腕よりも足の軽さに流行る医者

軌る戸へ足も一役買つて開け

震う手へ易者あつたなと思ひ

ある日ふとベン

愛称で呼ばれどうしの嫁の幸

勝つた時だけパチンコの威勢よし

ボーナスの税金だけがよく目立ち

禁酒してから座席を隅へきめ

敵側へ廻れば怖い部下をつれ

子が味方妻は野党の強さ見せ

金借りた人に出逢うたモーニング

へそくりで一白増したとは言わす

同 伊藤 年枝

同 須藤 鉄平

同 西岡 洛醇

同 木村 十悟

同 大塚美能留

同 松島 不在

同 藤原 民徳

同 山本 春也

同 香山 樂天

同 森本黒天子

同 御戸 凡平

同 岩田十三楼

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

同 佐藤千代春

武信由太郎著 研究社

...A short witty (humorous) ode; a satirical poem...

○小百科事典(昭和二十九年)

下仲綱三郎編集 平凡社

人事の弱点を穿つたところに

特質があり、形式は5、7、

5の十七字であるが、切字、

季題などの法則があり...

○辞海 (昭和二十七年)

文学 金田一京助編纂 三省堂

博士 俳句の切字、季題等を無視

し、つとめて通俗的な口語を

用いて人生の機微、世態の欠

陥をこつてい、諷刺、奇響の

立場からとらえて描写する...

○言林 (昭和二十八年)

文学 博士 新村出著 全国書房

俳句とは趣を異にし、切字、

季等のきまりなく、多くは口

語を用い、人情、風俗、又は

人生の弱点をつき、世態の欠

陥を諷し、滑稽、機智、奇響

を特徴とする...

○新百科辞典(昭和二十八年)

三省堂編纂所編纂 三省堂

普通に俳句と同じく、五、

七、五の三句から成り、切字、

季等の約束なく、世態の欠陥

を諷し、人生の弱点を刺し、

最も着想の警抜なるものを尚

ぶ...

○国民百科大辞典(昭和十年)

富山房百科辞 富山房

典編纂部編纂



日曜の和服課長の野人めき 大阪市
 又碁盤潰しに幹事やつて来る
 煙草の火消してむしんを断られ 天理市
 隆鼻術してから理想少しあげ
 洋服がばりつとしたり税吏たり 赤穂市
 亀に越され未熟の我を顧みる
 洋裁の腕が田舎を又くさし 滋賀縣
 出世せぬ友ばかりなり年賀狀
 頑強に越年資金子がせがみ 倉敷市
 やりくりのこつを覚えて太く生き
 ボーナスの日も雑炊をたいて待ち 倉敷市
 正直な店の構えが小さ過ぎ
 子多きに猫まで抱く母であり 尾崎市
 磨かれし靴に心もほぐれて来
 景氣とは別な人出を見て帰り 倉吉市
 慾だけが解決されず年の暮
 やけ酒と見抜いて妻は逆らわす 岡山縣
 凶作の供米軽う牛が引き
 スタンドの灯でよみ返す子の見舞 和歌山縣
 退屈が来て内職もはかどらず
 退屈は去年の今日の日記読む 和歌山縣
 片肺で失業の世へ生きんとす
 表彰狀以下同文で片附ける 貝塚市
 門出れば春遠からぬ道つゞき
 お土産にする手荷物は上へ置き 岡山縣
 手荷物は夫が持つて里帰り
 公民館今日椅子足らぬ映写会 廣島縣

丹波 太路
 同 菱田 満秋
 同 川西 去水
 同 久保 和友
 同 野田 一念
 同 長尾 越鳥
 同 林 澄子
 同 奥谷 弘朗
 同 田口 紫陽
 同 田中無津美
 同 那須虎兒郎
 同 鈴木 鈴彦
 同 小川 蔦坊
 同 山田 紫蘭

河豚を食う勇氣を思う庶務課長
 よそ様はどうのこうのと妬く炬燵 岡山縣
 八十になつても蛸とまだ挑み
 正札を値切る氣で居る年の市 廣島縣
 新刊のインキの香り置炬燵
 いろ／＼の癖がついてる局のペン 今治市
 読書して夜なべの妻をいたわりぬ
 人好しを叱つて友もお人好し 西宮市
 魚屋の手は鳴りやまず暇らしい
 花束が素通りして行く面会日 松江市
 月一も承知でにぎる十二月
 恋失せて一輪差しも忘れられ 出水市
 雨だれが慕情を誘う佗住居
 ひばりちやんとすよと産婆開けて 兵庫縣
 縄のれん債鬼が足を覗きに來
 テインエイヂヤー内緒煙草にむせかり 京都市
 ベン軸の尻で受付小窓あけ
 雀の涙程の金を皆んながあてにと 大阪市
 生きるとは悲しき今日も金借りに
 薬味取る手もやれ／＼とみそか 天理市
 今日だけはピースを買うたラッパ 貝塚市
 入院日記念になつた禁煙日 貝塚市
 よりそつて観れば映画にまけぬ恋 御坊市
 退職のもう商人で社を訪ね 兵庫縣
 大阪はいゝなと思う日が続き 滋賀縣
 はころびし法衣の下の紅椿 大阪市
 開店のコーヒ香りを満喫し 兵庫縣

同 池田 古心
 同 山田スミ子
 同 越智 一水
 同 東浜 成詩
 同 橋本白郷子
 同 川端 柳風
 同 酒井ひか平
 同 松下京一樓
 同 永田都詩子
 同 阪本 貴通
 同 柿原おかき
 同 小野 広志
 同 岡崎 泰三
 同 小西富士子
 同 花柳萬亀子
 同 山川 阿茶
 同 前川左文子

：ソノ内容形式ハ人情風俗ヲ
 十七字ニヨツテ表現シタ平易
 ナ短詩デアル。併シ中ニ八十
 四字ノモノモアル……明治ノ
 後半ニ至リ川柳復興運動ヲ
 見、安永、天明時代ノ川柳ノ
 本質ガ檢討サレコ、ニ復古派
 ガ出テ狂句ヲ排撃シ、又一方
 ニハスペテノ拘束を廢シテ新
 シキ時代ヲ表現セントスル新
 興派現レ、次デ大正、昭和ニ
 入ツテ革新運動起リ、純芸術
 ノ立場ヨリ作句シ現在ノ新川
 柳ガ生レ「川柳きやり」一番
 傘「ヲ初メトシテ數十種ノ雜
 誌ノ刊行ヲ見ルニ及ブ。川柳
 ハ俳句ト異リ季節ナク、又
 や。かな。けり。等ノ切字法
 則ナク、最モ自由ニ森羅万象
 ヲ詠ム大衆文学デアル故ニ、
 大ナル隆盛ヲ見、国文学史上
 重要ナル位置を占メ稀ニ、コ
 レヲ風俗文化資料トシテ見ル
 トキハ貴重ナル文献デアル……
 ○世界文学辞典(昭和二十九年)
 斎藤勇編集 研究社
 ：俳諧の発句と五七五の型式
 は同じでも性質を異にし、季
 題とか切字などに拘束されず
 題材も人事的なものが多
 い。……
 以上の如く国民百科辞典が、少
 しばかり、現代の川柳について述
 べ、又その重要性に及んでゐる以
 外は、殆んどが狂句的なものとし



これ以上飲めぬと幹事酔うていす 大阪市
家計薄へ菓子くくくと交際家 岡山縣
アルバムに妻の了解得て残し 岡山縣
只一目母に見せたい眉を植え 岡山縣
残る日へ忙わしく動く毛糸玉 岡山縣
銀行のストープ客がくべていた 山口縣
お互におこり合つて呑みつぶる 玉野市
赤旗の威勢を見せた十二月 大阪市
誰のいたすら花嫁人形の首が折れ 大阪市
薄氷を踏む足音に似た生活 大阪市
酒が出ることを一筆つけ加え 石川縣
クリスマスツリーは店の飾りとし 岡山縣
ボーナスが化けた納税領収書 岡山市
パチンコも馬鹿にならぬと首かし 堺市
面会簿妹などとかいてあり 貝塚市
板塀の落書消すも十二月 岡山縣
酔うた目に女房の手の荒れたこと 岡山縣
年の市買物銭より量が張り 岡山縣
一ケ年添うた喪服の淑やかさ 堺市
ニセモノを造る会社で酷使され 京都市
百円のネクタイ同志仲がよし 新潟縣
関西のみんな優しい便り来る 鋼路市
次々にへそくり出してうたがわれ 尼崎市
たゞすねるだけでも上手下手が 岡山縣
せめてものボーナス家で封を切り 西大寺市
新春へ持ち越す話よい話 愛媛縣
水涕は天声人語の上に落ち 和歌山縣
供米に先立ち銀行もう来とり 岡山縣

杉森真砂魚
山田ゆき江
舞島 白郎
浜口志賀夫
岡 一門
徳光 秋人
星川 陽石
石本 一子
橋本みどり
清水 和夫
中松 一恒
亀井 星浦
小野花団子
高崎 竹声
秋山天一坊
及川 南洋
有元 幹二
佐々部 謙三
田中 春翠
楠 輝雄
高野 不二
渡辺伊津志
中屋 すぐ
石原 文郎
西山 晴々
堀内 曉風
岸本 木魚
末房 至孝

デパートは夫婦の足並そろわない 新居濱市
出刃庖丁バラ／＼事件ふと思ひ 岡山縣
変り者ですと質屋で念を押し 下關市
ニコヨンの小春日和へ高笑い 倉吉市
退院はこれも要らんと気前よし 和歌山縣
雨宿り日頃の御無沙汰いゝ添える 和歌山縣
便箋へなか／＼書けぬ十二月 松江市
良い経過云つて孝行した気持 和歌山縣
退屈な身分に母はなりたがり 和歌山縣
秒針の音反響す療友なき夜 和歌山縣
花咲かぬ二十世紀の灰が降り 西大寺市
名を挙げて恩師に逢えた旅興行 和歌山縣
いつの間に父に逆う朱に染まり 和歌山縣
郊外に住んで空気の味を知り 大阪府
アルバムへ陸士の頃の肥り様 神戸市
戦争が終れば次は肺病か 和歌山縣
初夢もやつぱり僕は病んでいた 和歌山縣
忘年会あいつは駄目よ恐妻家 京都市
再軍備と騒げどワラジ編める祖母 石川縣
メニユーに時価とあるのを除けて決め 大阪府
魚屋の油断を猫は見のがさず 倉敷市
浮いてきたやつを捉える豆腐鍋 奈良市
年賀状一年振りで墨をすり 岡山縣
不足等何んで言えるか食える身だ 鳥取市
平社員ラツキー蔭で吸うていた 大阪府
飲んだことだまて医者に診て 鳥取市
働くに職なき私の手の白さ 出雲市
こゝからは大阪という火のネオン 大阪府

加藤 向水
田淵 笑鬼
中村九呂平
横山 生二
高木 緑葉
舞川素粒子
小林孤呂二
田中 能子
土井 京子
松本 旅人
吉田 清遊
深田やよい
木下 一休
上村三波子
野村 初甫
植松 福美
松本 溪泉
楠光 二郎
山崎 北柳
川口 秋香
岡野風の子
鍛永 晶平
藤田 美雪
岩田天保銭
樋口 精斎
北村 三步
三吉 美好
深見 雅堂

ている。

且つては川柳が時の為政者の忌諱に触れ、或は心なき四世、五世川柳に依つて、墮落し狂句的形向となつた時代があり、又現代に於ても「エロ・グロ」カストリ川柳があるにはあるが、正しい社会の批判の前に影を薄めて、今や世界唯一の詩藻豊かな生活を謳う短文学として認められつゝあるのである。然るに最も権威ありとされているこれ等辞書、辞典が、この様な状態である事は遺憾と云わざるを得ない。この点認識を新にして、版を改めるに当つては、厳正にして忠実に、その真髓を伝えられん事を切に望む次第である。そうする事が読者に対する親切であり、又義務でもあると考えるのである。

ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

明色アストリンゼン

桃 谷 順 天 館

川柳第二教室

うつぶんとひみつ（研究題「日記」）

戸田古方

あらためて日記ということばを
しらべてみますと、客観的な記述
を主とする時代がはじまりで個人
の生活記録となつたのは余程後ら
しく、日記がそのまゝ文学になつ
ている例も少くないようです。集
つた句は全て普通にいう日記で、
公開刊行された文学としての日記
にふれているものは見当りません
でした。しかし生活記録としての
日記は自覚や反省のよりどころと
なります。人生陶冶の一役をにな
っている点、川柳自身のあり方と
大へん似たところがあります。
「うつぶんが晴れるか妻の日記」
帳 保夫
「内気者せめて日記で腹を立て」
修
「日記だから夢や悪口も書いて」
落み 笑雷
徒然草に「ものいわざればはら
のふくるゝわざ……」ということ
ばがありますが、日記にはこうし
た安全弁的作用があります。

路郎先生からよく伺つた「はら
が立つた時は句にしてしまへ、は
らの立つたことなど忘れてしまつ
て、身も心も涼しくなれる」と、
「土下座してあやまつたのも手
であつた」古方
私も一句の出来た途端に安心して
ねむつてしまいます。たしかに文
章の日記より一段効果がありま
す。作句活動は作文より以上の強
い凝集力をもっているからでし
やう。
さてこの三句ですが、はじめの
二句はこれといつたてらいもな
く、極く素直な表現です。「せめ
て日記で腹を立て」た時にはもう
腹も治まつているでしょう。第三
句はそれよりずっと冷静で批判
的です。
「ぬすみ見た父の日記で家出止
め」貴通
「妻の顔どうも日記を見たらし
い」弘朗
みられたくない日記、ひみつにし

たい日記、だから他人の日記をひ
よつこりのぞいた時には闇の道で
蛙をふみつけたぐらゐのスリルは
あると思います。
弘朗さんは標準型、貴通さんの
は下五の「家出止め」で人情味を
感じます。
「汚職の煙立ちその日記灰にす
る」満佐志
「家宅捜査のがれて日記無事に
おり」同
「捜査班卓上日記もはぐつて見
春也
ひみつもこうなると探偵ものです
が、法の罪はとにかく、道徳上、
宗教上の罪を犯してはいない人は
たして何人あるだろうか、嚴重に
やつたら法の罪さえはたき出かね
ない心を恥しく思わずにいられま
せん。
「パチンコをこれでしない」と日
記つけ 北柳
心という字に大きな鏡前をかけた
絵馬の代用品みたいな日記。「日
記つけ」の「つけ」はどうでし
やう。「日記つけ」を「……とい
う日記」ぐらゐにした方がよくな
いでしやうか。
「日記にだけちよつぱりかいた
すきな人」雄声
「本心を日記にかいてる片思い
五茶
「日記帳かくす娘も年頃なり」
昭男
「愛してるまじめにかいた日記」
帳 登
ごちそうさまの句をならべてみま

した。五茶さんのは定石の出来て
いる句、登さんの素朴さには魅力
があります。
「心の記録へ日記に鍵をかけ」翠露
年末になりますと鍵のある日記帳
を見かけますが、この句にはあえ
て現実の鍵を問題にする必要はな
いでしょう。
この句でテニオハ「へ」に注目
してみましよう。この「へ」は心
の記録「である」日記と行くのだ
らうと思ひますが、この「であ
る」と「へ」とをくらべてみます
と、「である」と割切つてしまふ
と「である」から一歩も出ず単な
る説明に終つてしまいます。「へ」
の中には「である」の意味は勿
論、その上に何かしら加わつてい
るのを感じることが出来ます。こ
れが余情であり、余韻でありまし
て、句主の愛情とか信頼とかいう
ものがにじみ出て来ます。
昭男さんの句は「なり」で止め
てありますが、この「なり」も本
来は二つの意味をもつたことばで
ありまして、一つは「在る」であ
り、他は「成る」であります。
「年令になつた」といえば成るで
すし、「年令である」といえば在
るであります。原句の「年頃な
り」の間に「に」を、補つて「年頃
になり」としますと成るだけしか
表わせません。「年頃となり」では
やはり在るだけです。割切れるだ
けで面白味はありません。「年頃
なり」ですと「年頃なんだから無

理もない」というような含みをも
たせることが出来ます。こういう
ところに短詩のもつ詩性があるの
でしよう。登さんの素朴さも「愛
してる」のあとに「まじめにかい
た日記帳」とブツきら棒の続け方
をしています。句意の素朴さを
一そう助けているようです。
テニオハの研究は十七音字中心
の句に於ては大切なことだと思ひ
ます。最後に
「日記帳書くため母の肩をもみ
子供に關する句は沢山集つており
ますが、顔を洗つて、ごはんを喰
べてとか子供の日記を取扱われ
た中にこれは少々こまじやられて
いるかもしれないが、一日一善
の記録です。何というても子供時
代は修業の時代、偽善とまでい
てしまふのはちと酷じやないでし
やうか。又日記の功德の一つは
ないでしやうか。――一二、二二
（お願い）これから課題とは別に
雑吟も送り下さるようお待ち
しています。又一句の研究を時
々やつてみたいと思ひます。そ
の場合授句された方の御願ふれ
をそるえられないこともござい
ますので御承知下さい。
第二教室研究題
「陽気」及雑吟 合せて五句
メ 切 二月十五日
発表 四月号誌上予定
授句先 豊中市本町三丁目二〇
一 戸田古方宛

川柳
映画

柄井八右衛門

東野大八

本誌新年号所載の戸田古方氏の「川柳映画化の可能と困難」を讀んで、私はゆくりなくも、三年前の鶴岡舟の中を思い出した。

当時私の社で「落城前夜」という時代小説を夕刊に連載していた。その作者である南条三郎氏がさし絵の野口昂明氏とともに、この小説の取材のため来談したので、いゝ機会だと一夜この二兩人を鶴岡に招待した。接待役で私も同席したが、話はその舟の中のことである。

「このごろの小説ときたら石川五右衛門だの酒呑童子だのとロクなものが現れないね」と私がいつたことから南条氏が、「一種のこれは流行すな、ところで私も恰好の人物をみつけないと思うが誰かいますか」ときく、私は即座に「ありますよ、柄井八右衛門はどうですか」と言つた。彼は、この名になじみがないらしくハテナという顔付だ。そこで私が柳組川柳の人となり

あらまし説明すると、はじめて納得のいつた態となつた。

「柄井川柳在世の当時は、安永、天明のころで江戸文化の最盛期にあつた。田沼意次の暴政から松平定信の節儉時代へ、庶民のこうした為政者に対するレジスタンスは落首、狂歌、狂詩、川柳とその頂点に達した。前句附からなげ川柳が生れ、川柳と変つていつたか、このコースをテーマにして町名主の孫としての八右衛門の人となり思想、行為、主張を描き出してゆけば、庶民史のとほけた一コマともなろうというわけだ」と私は得意のハリ店を展げはじめたが、野口画伯が傍らであくびをしたので、これは酒席でチト硬すぎる話と悟つた私は、早速接待役の話題転向を図つた。

「まあとにかくこの八右衛門を、巻羽織か何んかのべらんめえおん曹子に仕立て、それに花屋久治郎という出版屋と、風来山人という共産党肌の狂歌人をからませ

る。色けが欲しければ、八右衛門に矢場の女か、お奉行様の息女でも惚れさせる。当時は大名、旗本、町奴の三国志だし俳句は蓼太、画家は鳥居派、劇作家芝金交

といつた風に多士才々なんだから、チョンマゲ芸術家や詩人の巢にいるようなもの、フィツクションも意のまゝです」と酒の入つた私は至極興にのつて調子にのつた。彼氏私の熱心さに笑ひも出来ずか酔つたと見えぬ面持で、せつせとメモをとつたりしている。ところが野口画伯がまたも、二人の間からかく一言したものだ。

「こいつあ小説より映画でいつた方が当るぜ」うむと私は思わずつまつた。この話は小説より成程映画のものとと思つたからだ。そんなことから一座は、川柳は果して映画となり得るや、ということまでひととき賑わつたが、結局話はそのままとなつてしまつた。

さて戸田氏の一文を讀んでの私だが、以上の話が記憶にあるせい

か、川柳を劇映画ではどうであらうか、とも考えている。

まず文化映画だが、私はひとこ軍政部の命令のためか愚にもつかないCIE映画を各映画館のべつ強制的にみせられたせいとか、どうもこの種のものについてはゆけない気がする。たゞしである。

「月の輪古墳」「雪」「北斎」などの優れた文化映画をみたときは、くだらない群小劇映画を百本

みるよりもこれ一本をという深い感銘を覚えたものである。だから同じ文化映画を作つても、ありきたりの二巻ものでなく、この種の水準の高い芸術価値充分なものでありたい。川柳人の皆さんも同感だろうと思うが、真の文化映画「川柳」は、一重にその製作意図なり態度なりに高い比重がかゝつて然るべきだと思われる。華山の「一掃百態」あたりをタイトルバツクとして、江戸文化第三期にあるさまざまな芸術的価値の深いもの、たとえば絵画、漆器、建築、工芸をつぎつぎ示しつつとはなくその製作者の周囲から江戸時代の習俗へと持つていく。大名行列から歳事記へ、そして街道から武家長屋にそして露路中へ、といった風に。それに珠玉の古川柳を配し、次第にその背景を進化させて新らしい川柳に入つていく。美的構成の序曲から次第にコントに入り劇化させて行く。人間史の歩

みとともに、川柳の生々も向上していく文化映画川柳に対するこれは、私のモチーフだが、この点俳句は文化映画にするとうちも絵画的で動きがないように思われる。宮城道雄の春の海か何かの旋律にのつて、花がこぼれ水が光っている、といった具合に。まことに靜的。

以上のように、私は文化映画にも川柳が欲しい、その夢がある。しかし、どう考えても私の場合は、劇映画柄井八右衛門でいつた方が万人向きのようないない。もつとも劇映画といつても決して正月向の東映娛樂篇では決してない。戦前では前進座作品の「阿部一族」戦後では吉村作品の「夜明け前」といつた、重厚な時代考証と現地ロケの貫祿をみせた真摯なもの。

南条氏に語つたように、劇映画の「柄井川柳」は、川柳の句の発生がどういふものか、詠み出されてきたか、そしてどのように時の庶民に共感され支持されていつたかを語り、人間が川柳によつて陶冶され、生活化され前進していくかを示す。俳風、絵画、黄表紙の作者群の中に、川柳作者がいかにか人間のインテリであつたか、同時に裏づけていく。狂歌と区分するには、蜀山人、風来山人この狂歌連を引合に出していけばよい。句会の一つにしても環境を史

実に獲つて追つてゆけば、今日の句会と対比して興味も一層深いものがある。

要は、今日の新しい川柳がどのようなものか、ということの重

要な点へのふりわけだが、これと近代川柳の鋭敏な詩的感覚をもつてすれば、古川柳の中にも新川柳の要素はいくらでも織りこんでゆける。

この映画の要素は、とにかく人間川柳の開花と在り方を究明していくことに眼目がある。

要するに私の言い分は、文化映画でも劇映画でもよい、視覚に川

柳がどう訴えてるかを識るだけでも、この試みに意義があり価値があると考へたりしている。文化映画を後進しにしてまず劇映画を作れ、という意味では決してないこ

とを蛇足ながらつけ加えて、一日も速やかにフィルムに収めた川柳をみたいことを皆さま同様、私も期待している。



ふるさとのほほえみ

富士野鞍馬

「川柳雑誌」の豆秋さん。ユーモア作家の豆秋さん。その豆秋さんの句集が「ふるさと」と銘打って出版された。路郎先生の序文にもある通り、ユーモアの血は、川柳人の誰の血管の中にも流れているが、これを、十七音詩としての吐くことは、仲々むづかしいことのようにある。私も、常に、川柳作家に、笑いの句を奨励しているが、これがむづかしくて、私自身にも、少数の句しかない。名優でも、泣くのは上手であるが、笑い

読むほどに、よむほどに、微笑を感じ、明朗になる。私は、川柳によつて社会の明朗化を、前から高唱している。それに、いつも、豆秋さんに、先を越されている。

「ふるさと」の巻頭に秋風の中で乞食に拝まれるがある。人情話のエキスのようで、誰にも、ズキンと髓までひびくであらう。

骨立てたまふ二次会へつて行き人間は、笑いをみなもっているのであるが、こういう風に仲々わらない。

手ぶらでは鹿も相手にしてくれず世相人情を諷刺して、そして微笑を催す。

写真班もめてくるのを待っている写真班の真剣な顔を客観すると、またそこにユーモアが湧く。

フーパンでいけたらいいを涼しかりやみなく、これだけのことが

表現できる豆秋さんは、幸福である。

病人へみんなたかつて嘘を言いガンの患者には、みんなたかつて嘘を言いである。

兄が追えば鳩は歩いて逃げるなりヨチ／＼あるく子が目の前にいるようである鳩が歩いて／＼は感心。葬式で会いほろいこおまへんか葬式に来て、商売上の紹介をしてもらう人もある。

むかしむかし稼げば楽になりしとか時代を諷刺して妙。今や失業者数百万人。

こんな時えらい坊主も出んかいな現代は、僧侶もやはり生活に苦しい。

ほとけさんこれ十円まんじゆです饅頭の価は、千倍にあがつてる。

金もろた方へ政治はころぶなり「役人の子はにぎ／＼をよく覚え」というた川柳があるように、昔からそうである。

みの虫のなんぼ飼うても壁だつたこの句からは、いろ／＼のことを放射する。名句であらう。

恐ろしい風だつたと雀しやべり合い今晩は台風だとさコスモスよ正に一茶以上のものであらう。

豆秋君が今年還暦を迎えられた上に句集も美事な出来栄えて正に両手に花と言う最良の日をもたれたのは唯かし感慨深いことであつたであらうとお察しします。二十数年来の柳交でありますが常々私は三ツの内の二ツだけは同君より上かと思つて居ました。つまり句では迎もかなわんがまア年は少しは私の方が上かも知れないし、頭の毛も私もあんまり自慢出来ませんけれども共並べて見たらこれもどうやら勝てるものと自任して居ま

した処、今度の還暦を祝うて一とまわりも上の兄さんである事が判るに及んでこれも完全にかぶとをぬぎました。残るのはそこはかとなき頭髪に頼みをかける有様となりましたが減りこそすれ増える見込みのない頭の毛ですからこゝしばらくするとハゲ振りでも敗退するでしょうから今の二対一は三対〇と相成る筈です。ともあれハゲは健康のシムボルとも言いますから同君の句と共にいよ／＼光輝発らつてお祈りします。

二対一

吉田水車

暖房の一ぱい！ 又格別



アサヒビール

(十二月)



江戸川柳に詠まれた市川

團十郎 (一)

— 其の家紋を中心として —

阿 達 義 雄

(序)

江戸時代の川柳や狂句には、歌舞伎の荒事役者市川團十郎が頻りに詠まれてゐる。余りに句数が多い為に、反つて團十郎の実体が捉へられない程である。

従つて、研究処理の上から考へると、或る一点に焦点を絞つて之を考察し、それを抛りがかりにして、順次、全貌を追求して行くより以外に方法がないのではないかと思ふ。

そこで、私は、先づ市川團十郎を詠んだ句の中から、其の家紋を詠んだ句だけを蒐集分析して、川柳に現れた市川團十郎の実態の骨組を作つてみた。

江戸川柳。私はこの言葉を初代川柳選の所柳点及び川柳風な句、文化・文政・天保の狂句をも含むものを意味させてゐるが、江戸川柳には実に多くの武家の家紋が詠み込まれてゐる。勿論、武家と言つても、其の大部分は大名家である。

然るに、町人の家紋の江戸川柳に詠

まれてゐるものは、寥々たること曉の星の如きものである。だが、たゞ歌舞伎役者は町人として、此の欠を補ふかの様に、姓よりも芸名よりも其の家紋によつて詠まれ、幾多の大名紋と相對峙して、町人の為めに万丈の気焰を吐いてゐるのを見るのである。

大名紋と雖も、江戸川柳に於て、二つの紋によつて詠まれてゐるのは、細川の九曜星と桜の紋だけであるのに、市川團十郎家に至つては、三樹・福牡・丹・三筋立に鯉・蝙蝠・三階菱・松川菱に薦といふ巨大にして文様化された紋章によつて詠まれ、固定して動かない武家紋に對し自由無礙なる家紋を以て、舞台から民衆に呼びかけ、抑圧された町人の願望を一身に引き受け、彼等の拍手に應へてゐる。

江戸川柳に於ける歌舞伎役者紋の考察は、或る意味に於て、当時の庶民大衆の念願・希求の探索であるとも言はれよう。

(一) 三 樹 紋

(1) 三 升 紋

江戸川柳に出て来る三升紋は正しくは、三樹紋と書くべきであらうが、原文にはみな三升となつてゐるので、一応そのまゝにして扱ひたいと思ふ。

先づ、その四角な点を問題にしたものとしては、次の様な句が見える。

○六角と四角笛字と紋所(けり柳下)

六角義賢は近江観音寺の城主で、其の力を借らんとした足利義昭を援けず、三好党と通じ、遂に織田信長に追はれた人物である。

義賢の苗字は六角で、四角な紋、即ち三樹は江戸人士渴仰の的となつてゐた歌舞伎界の覇者市川團十郎家の紋所である。

○むさばんの三つぐみ江戸で名が高し

(二)

樹の縁に鐵板を張らない樹を武佐ばんと言つたが、此の場合、本樹でないものといふ意味で、團十郎の紋を「むさばんの三組」と言つたのである。即ち、三升の紋は大小三つの樹を重ねた様な図柄である。

宝曆八年序のある『愚痴拾遺物語』

「芝居役者市川團十郎が三升の紋は、いさゝかわけあるよし。彼が誠の紋は丸のうち一文字の由、是は日といふ文字、日月の紋をかたどる。役者は河原者故、我は人の数にあらずと、わざと三升と付けたるは、天地人三才の人にあやかたしと已辭讓の紋のよし。」とある。

○団藏も式升そこの取りまはし

(寛政十二年・三)

—— 前句「てうほうな事」——

団藏は二流どころの役者。市川団藏などと言はれてゐる者でも、團十郎の真似事くらゐはすると云ふのである。

○七代目二斗老升の紋所(六)

○先祖から升目はきれぬ七代目 (七)

江戸の川柳狂句に三升紋に因んで詠まれてゐるのには、七代目・八代目のものが多い。

右も市川團十郎七代目の紋章句で、一代で三升なら、七代では二斗一升といふ算術的な狂句である。歌舞伎の名家は必ずしも、血縁によつて何代目何代目と稱してゐたものではなく、女形の名家瀬川菊之丞などは、寧ろ他人に後をつがせた場合が多い。然るに市川團十郎家は代々名人を出し、血縁によつて後をつがせてゐたのであつた。次は八代目、

○定紋は二斗四升めの新之助 (八)

—— 之は文政六年十二月廿二日開きの句である。

新之助は八代目の幼名。三八の廿四で、二斗四升といふ処である。開卷年月から考へると、右の句は七代目の長男たる新之助の誕生を祝ふ意味で作られたものらしく、この句の作者は仰りの門人「その女」となつて居り、判者は柳亭種彦である。

子役でも立者にする江戸の升 (六三)
七代目の團十郎の長男は、文政十二年、河原崎座の顔見世で暫の大役をつ

とめ、天保二年には早くも団十郎の名を嗣ぎ、親譲りの芸を以て、二十才前後にして既に全江戸の人気の焦点となつてゐる。

○親玉の土地は水まで升つなぎ (七二)

○親玉の土地水にまで升つなぎ (二一九)

——將軍家のことをも団十郎のことをも親玉といふ。

親玉の土地は將軍家の御膝元。「樹つなぎ」は市川団十郎の定紋の三升から出た三升つなぎで、当時の流行として手拭や浴衣地に染め出されたものである。この模様を江戸の水道に詠みかけたものである。之もまた三升の紋章句の一変態句と考ふべきであらう。

四代目・七代目は後で深川の木場に隠退してゐるが、其の附近は釣場として知られてゐた処で、

○三升があたりがはぜの喰ふ所 (昭和六年天・2・オセウ)

——前句「にぎやかな事」。

「はぜ」は沙魚。

【注意】引用句の下に括弧して、(七二)

(二一九) などとあるのは、「柳多留七三篇」「柳多留一一九篇」

等を省略したものである。

(ロ) 三升の値

「我衣」を見ると、「元祿の頃、古団十郎元字金にて給金五百両に定む。是高給金の始なり。其後正徳年中、芳沢あやめと云ふ女形、乾金千両にて下る。夫より子団十郎、後老名海老蔵と云、是千両の上へ給金取上る。」とあるから、金貨の下つた文化・文政・天保の頃に、団十郎の給金が之を遙かに上廻

つてゐたことは勿論であらう。「守貞漫稿」にも、「年給千両の者を千両役者と云ふ。八九百両以下は此称無し。」とあり、市川団十郎は代々、押しても押されぬ千両役者であつた。

※千両も三分も見える団扇見世 (五三)

※千両と三分が堀江町に見え (五〇)

——堀江町の団扇見世に千両役者の似絵や華魁(屋三)を描いた団扇を売出してゐること。屋三は最上級の紋。

右は最上級の役者を千両役者と言つた證句。

○其の値箱の上越す江戸の升 (二五九)

は三升紋の団十郎の給金が、一箱即ち千両の給金を上廻つてゐたことで、千両役者といふ語に拘泥した句には、

○一ツ升が三百兩の余に当り (八八)

——三升が千兩なら、一升は三百三十三兩余。

三兩余。

(ハ) 三升紋の人氣

荒事謳歌の江戸に於ては、団十郎の人氣は圧倒的で、荒事の宗家とは言へ、女性間に於ける人氣もあなどり難く、

○長局三升くゝと寝ずに居る (七二)

○三升がよいと腰元なめすぎる (昭和三年)

などは、奥女中間に於ける其の人氣を語るものであり、又、一般に現れた三升紋(市川団十郎)の人氣は着物の模様や柄によく反映してゐる。

三升紋の影響と認められるものに

は、

○成田屋じまも四分利のばくの纏 (二〇〇)

○嫁の顔成田格子の額が出来 (二三四)

成田屋綺は三筋格子・三升格子・成田格子とも言はれ、文化十年より流行し始めたもので、『寝ぬ夜のすきび』に「三すじ格子は家紋の三柵の格子に崩してかくせしなり云々」とある。

甲句は四分利の質に洒落れて、不動

故に、縛の繩と言つたものであり、乙句は成田不動を思ひ起して「願」と言つたのである。成田綺などと言つても、その綺は、三升の紋を綺柄化したものである。

この様な人氣があつたからこそ、芝居にも、

○江戸升の札は売切れ申候 (八二)

となり、地方廻りの偽団十郎一座なども出て来て、その偽升で田舎者を欺る様なこと迄も行はれたのである。

○似せ升を遣つて歩く旅芝居 (三九)

○むさばんで見物はかる旅座本 (八八)

○田舎者江戸の三柵を嬉しがり (昭和九年)

——前句「けつこうな事」

(ニ) 三升紋と団十郎の舞台姿

先づ、「暫」の狂言の三升紋の柿色の素袍を、当時、同じく柿衣の上つ張り着た酒屋の奉公人に掛けて、

○江戸一を柿の着物で升へつぎ (三三)

と詠んだのであるかと思へば、暫の髪飾りを神酒の口へさす奉書に見立て、しかも、そこに三升をも詠み込んで、

○組入れの素袍あたまたに神酒の口 (三九)

更に、定紋応用の飾木太刀の三升鐔

を、

○つがもねへ飾り木太刀の三升鐔 (八〇)

「つがもねへ」は舞台上に於ける団十

郎の常套句で、当時江戸の流行語であつた。

○しやうぶ太刀三升の中をつき通し (昭和三年義・二)

又、立役の荒事師の赤隈を、その頃流行の三升鮮に結びつけて、

○赤隈に漬込む海老の三升鮮 (二二九)

——海老は団十郎の別名、海老蔵にかく。

(ホ) 三升紋と三升艾

市川団十郎の三升紋にあやかつて、江戸中に賣り弘められたものに三升艾がある。この艾を賣る店は三升紋を商標として、団十郎ばやりの浪に乗り、その賣れ行きを計つたもので、三升艾は一名団十郎艾とも言はれてゐる。

初代団十郎に、強いといふことから団十郎を象徴して、切艾に三升の紋をつけて神田鍛冶町の箱根屋庄兵衛から賣り出されたのが最初であつた。

享和十三年版の『諸芸評判金之揮』に、

「段々出世の三升の紋、江戸中店々のもぐさみせくりうるかますひや水尻かみゆい床にもかくれなく三升といへば団十郎云々」

この艾賣を益々有名にしたのは、宝永六年、二代目団十郎が山村座に於て、『傾城雲雀山』の久米八郎の役に艾賣のせりふを述べ立て、大当りをとつたことであつた。

三升紋を以て、この艾を賣出した店としては、通旅籠町の三升屋五郎兵衛、神田錦町の三升屋兵庫、その他多くの艾屋は三升屋と称し、三升紋を打つた看板を出して、江戸の誇団十郎や、その三升紋によつて、商賣の繁昌を圖つたのである。

山東京伝は「荏土自慢名産杖」に、江戸名物二幅対として、東錦絵と団十郎を挙げてゐる。以下句面に三升の語を詠み込んだものだけをあげてみる。

- 団十郎をする子三升屋きらいなり(九三)
——暴れん坊は三升屋の艾、即ち灸を据ゑられることが嫌ひ。団十郎と三升との縁語結び。
○三升を干してわんぱく寄りつかず(五〇)
——三升艾。
○三升屋と大家泣子に呼出され (四二)



新婚

尼 緑之助選

新婚の部屋だけ螢光灯がつき 一 策
呼び捨てへちこはに飯の湯気 成 詩
新婚の当時は罽も弾いてみせ 昌 平
十二章通り新婚日を重ね 九 呂 平
イニシャルを入れて新婚編んでくれ 牧 人
新婚のすねた姿にはれなおし 十 平
新婚のコンロうれしくサシ焼け ひでを
新婚の雨だれをきく日曜日 雄 声
隣りの子抱いて新婚散歩をし 一 山

一路集

信じ切つた臘新妻は門に佇ち 在
出迎えも新婚らしい蛇の目傘 代 男
今迄のように名前呼び合えず 与 根 一
新婚の辻で別れて共稼ぎ 有 子
新婚へもう宿直の順が来る 正 郎
二次会ときいて新婚ひやりとし 井 蛙
ちとやせた等と新婚冷やかされ 地 久 平
新婚のカラーの白さ冷やかされ 保 夫
駅弁屋から新婚やなと思ひ 五 茶
新婚へ配達無駄な気を使い 良 坊
新婚が降りて二等車ホツとする 雲 平
新婚が襖一重へ来て泊り 地 久 平

新婚の旅に話題のないつらさ 弘 道
新婚の気持はくした湯のかおり 春 日
新婚の客へサーブス考える 藤 波
新婚へ恩師が保険勧めに来 十 九 平
新婚へ悪友どや／＼と来る 同
新婚へ破紋を授けて友は去に 千 年
新婚へもう子供保険が来 阿 茶
新婚の悩みもあつた相談欄 不 二
新婚の親に背いた悔いがあり 草 一 路
新婚のもう彼氏ではない素振り 十 九 平
デフレ下の夢は婚休だけのこと 進 歩
新婚の甘さデフレ容赦せず 明 朗
新婚の夢が破れて衣食住 有 子
新婚の最早や恐妻家に属し 鉄 児
新婚のそくかと離れ貸してくれ 寛 虚
新婚の隣に住んで若返えり 善 坊
新婚へ隣の道具又借られ 五 茶
新婚の悩みの種は二階借り 一 念
新婚の便りとぎれて案じさせ 鉄 児
新婚へ母は函がゆいことばかり 一 策

——「泣くと灸を据ゑる」とか「泣くと大家さんが来る」とか言つておどかす。

○三升屋でしばらくだまをおつとめる (四八)

——灸で駄々を暫くとめる。三升と誓の縁語結び。

○もつとりきみなと三升をすゑて遣り (六二)

○三升が灸で筋限を顔へ出し (二〇〇)
——力んで顔を赤くするを、団十郎の赤隈になぞらへたもの。

○つがもなく利くと三升の灸をすゑ(五五)
——灸治。「つがもない」と「三升」の縁語結び。

○宿下りの灸は瀬川が三升なり (八五)

——日本橋十軒店角に瀬川屋儀兵衛店といふ店があつて、瀬川艾を売つてゐた。

御殿又は御屋敷に奉公してゐた女中・腰元などが一年に一回か二回宿下りをした時には、歌舞伎芝居などを見ることを何よりの楽しみとしたもので

ある。右の句は、事実、その際に灸を据ゑたといふよりも寧ろ其の時市川団十郎か瀬川菊之丞の出る芝居を見に行つて何よりの保養とするの意であらう。以上、それ／＼の句、三升艾の關係で、団十郎・筋限・つがもない等の縁語仕立のものが多し。

尚、解釈不明句として次の様なものがある。

○三升屋のおろしへ大はまだござる (二五)

私は賣られて
いる

長野文庫

民主党の某代議士の後援者名簿に私の名前がのつて居るそう。実はこの間某氏の私設秘書をして居るOS氏が私の家にやつて来て「先生も大いに君に期待しとる云々」の口上であるがまことに可笑しな話である。一方自由党の某代議士の帳面にも私の名がのつて居るらしいのだ。この方からもこれに類した話を聞いたからである。一体これはどうした訳であらうかと色々様子を探つて見ると、以前の選挙の際にそれ／＼の党の運動員が選挙事務所へ帰つて私が熱心なその候補の後援者になつたことを報告したらしいのである。それ以来私は双方の名簿へのせられて有難き有難き様子の而も熱心なる支持者になつて居るのだ。この塩梅

佳・我が道を往くと新婚気まゝなり いさむ
 佳・新婚の覗き込まれる卵焼き 牧人
 佳・新世帯苦勞を知らぬ灯がこぼれ 代仕男
 佳・新妻を淋しがらせて当直誌 寛成
 佳・新婚を気の毒がらせて夜勤する 葉光
 佳・新婚と見てつきまゝスナツア屋 牧人
 佳・新世帯猫がちよい／＼のまきに来 正郎
 佳・新婚へ一升持つてなだれ込み トン坊
 佳・子の出来る迄と新婚家を借り 木魚
 佳・子の好み嫁に教えて母帰郷 善坊
 秀・新婚へ兄の子供が入りびたり 阿茶
 秀・新婚に修学旅行遠慮せず 保夫
 秀・課を変えてもろて新婚勤めてい 昌平

頭数

木下幽王選

頭数社宅の畳へ折れまがり 恵二朗
 頭数かぞえて多い方につき 宇柳
 頭数汚職の金で寄せ集め 井蛙
 餅まきの眼に面白い頭数 鳥石
 炊き出しの指令と合わぬ頭数 同
 頭数人生感がまた違い 和友
 頭数揃うて智恵のない拍手 葉光
 ビンボケの写真頭数だけわかり いさむ
 頭数よみ紙芝居幕をあけ 同
 頭数そろつた組から改札し 満佐志

頭数足りぬアミダへ課長が出 五茶
 頭数に足らぬ土産を出しそびれ 同
 子の寝顔頭の数で酔がさめ 阿茶
 頭数一つ余つてジャンケンし 藤波
 頭数揃いイーチャンいくとする 一恒
 酔いどれが戻つて頭数揃い トン坊
 頭数だけの政治が行詰り 別城
 チツプまで加えて頭数で割り 一策
 頭数読むまで教師落ちつけず 水堂
 一打あれば安いのはよその国 寛成
 紙芝居頭数だけ買ひもせず 秋香
 頭数予定を越したので慌て 十九平
 頭数減らしてデフレ押切る気 一山
 先生は駅とは別に当つて見 玉兎
 クリスマスサンタ泣かせの頭数 美名月
 同窓の缺けて淋しい頭数 代仕男
 招待へ僕も入つて頭数 鈴彦
 騒ぎをば大きくしてる頭数 善坊
 二三人ごまかして居る頭数 ひか平
 頭数バスはラッパで急きたる 同
 陳情ヘドヤ／＼と頭数 古心
 頭数読んで落語の種をきめ 万古
 二次会へ次ぎ／＼減つた頭数 地久平
 割勘になつて頭の数が減り 鉄児
 頭数家族手当をうらやまれ 同
 頭数もう欠けている同窓会 十平
 頭数減つて二次会成立し 伍長
 無茶なは隅で飲んで頭数 柳叟
 頭数減つてもワンマン気の強さ 雲平
 頭数揃えに無口も会議へ来 美能留
 頭数足らぬ一人はパチンコ屋 雄声
 頭数減らして会社儲ける気 同
 控除欄だけ有難い頭数 十悟
 頭数かぞえ夜なべの灯に励み 白馬
 呑まぬのに勘定頭数で割り 満秋
 頭数揃えば記念写真なり 同
 まだ会議始められない頭数 光郎
 課長の椅子まだまだ遠い頭数 同
 強引に可決と決めた頭数 圭水
 頭数だけでは社長たじろがず 正柳
 貧しくも気強い子等の頭数 春日
 頭数とは云わず君でなければ 夏六
 頭数揃つた揃つた一年生 同
 ビルの風頭数だけの野球なり 進歩
 佳・再軍備いつしか頭数がふえ 代仕男
 佳・多数決鳥合の衆にある力 草一郎
 佳・採決かそれでは彼を呼んで来る 漫歩
 佳・頭数優等生が一人おり 十九平
 佳・校長の首にかゝわる頭数 花団子
 佳・頭数に合うような声で紙芝居 五茶
 人・頭数へんちくりんなのも混り 十九平
 地・頭数人格などと言うとれず 牧人
 天・頭数揃えてデモの波となり 和友
 頭数だけでは不満なびつこの兎 幽王

田舎に住めば

姫田夕鐘

だと社会党の方にも名が出るとかも知れない。斯う云う次第になつて居るのは何故かと云うと知らぬ間に私の票が売られて居る訳である。こんな例は私以外にも沢山あると思うが全く油断のならない御時世だと思ふ。考えて見ると全国では恐ろしい数の仮空の票が売買されて居ることが分るが、代議士も随分馬鹿なものに金を出して居るのにあきれ返る次第である。

一票が二票に売れる選挙戦旗色の分らぬ人の票は売れ

諸の金何日頃這入るのじやノ

そうじやノーシまだ十日先じやノ

ーシ

それじや日取を二十日にするかノ

ーシ

それにきめよかノーシ

これで結婚の日取が出来たわけ

校庭でドサ廻り。の開演。朝から赤飯に、すしは言うに及ばず、もろ／＼の御馳走外に、酎にろうそくも持参に及び、村中の見物開演中幕間を問わず、ろうそくを立てて馳走を喰べつゝ、酎を呑みつゝ、芝居に陶醉している。

四十年前程前に流行つたチョンガレ芝居に。

芝居に。

川柳雜誌社恒例の

師走川柳大會

本社師走川柳大會は多彩なプログラムを幹事や不朽洞会の理事の間で検討、十二月十二日（日）午後一時から下寺町の光明寺で開催の運びとなつた。以下当日の様を記録する。

光明寺入口には川柳雜誌社の提灯が柳人の来会を待つて案内役を務めている。

十二時、既に受付には梨里、藪乃、香林、淡舟、文蝶等のメンバーが位置を占め、来会者へ雅号を記入した白、黄、赤のリボンが渡される。（この色別けで今日の雪、月、花句戦の組分けが受付順に決定）会場は熱心な作家によつて席を占められ、早くも大会と云う緊張した気持になる。丹波の無鬼氏、滋賀県から夢生氏外教氏のめずらしい顔がなつかしい。続々と新人、古豪が入つて来られ、定刻一時には既に会場一杯になつて来た。

今日は支部対抗句戦があると云うので各支部毎に纏つて席を占めているのも普段の例会と異つた風景である。屋の光明寺の庭も一としは情趣があり、廊下には午後の陽がやわらかく射し込んで温かい。万葉、黙平、句軒、天眞氏等の顔が廊下の一角に見える。歳末句会に日頃忙しくて句会に出席出来ない方々の顔が見

られる事がこよなくうれしい。折から路郎先生、例の童顔をほころばせて、遠来の客、珍らしい柳人に一々挨拶を交しながら這入つて来られた。「あと十分で兼題のメ切を致します。」今日の立役者潮花氏の透き通つた声に、慌てゝ句箋に清記する者、出来上つて検討を加えるもの、今日の路郎選の「夜警」は二句だからどれを出したらよいかと先輩に予選をしてもらつてゐるもの等々、席題の選者が発表された。南海の古豪友淵貴山、川雑に此の人ありと知られた土井文蝶、両氏とも現役のバリ／＼である。定刻二時半兼題はメ切られた。各所に坐つて居る幹事が句箋を集めて廻る、「終点を頂きます」「雑音、雑音を頂戴します」「夜警を！」川柳雜誌社ならではの特色があり楽しい情景である。集めた句は幹事の両手に持ち切れない程である。潮花氏の司会によつて開会が宣せられ、中島生々庵氏の挨拶に続き路郎氏の漫談に満場は熱心に傾聴する。引続き本大会の興味のつである雪月花句戦に移る。題は「栄転」、制限時間は二分間である。紫香氏の合図によつて一斉に鉛筆をおく、作句の早いのは川雑のお家芸か。

会場はほつと一息、早速お茶が配られる。寺のお茶は美味しい。淡舟、愛論、実に行き届いたサービスぶりである。早くも会場の一角では遠来の客の持参した一升ビンをきこしめしている連中も居る、普段なら許されない生々庵理事長も今日は忘年会、終始にこ／＼して見て見ぬ振りをしてゐる。会場のなごやかな気分、今日は特に新人或いは婦人の顔が目立つて多い。新しいけい向として喜ばしい。

支部対抗句戦の選者は藪乃先生である。一分間の相撲吟披露は水客氏の名調子、さてどちらともいえないと思われる様な句も藪乃先生の的確な選によつて東、西、と軍配が上がる。名句には思わず拍手が起る。頭張れ／＼と支部から声援、中島生々庵氏は遠来の支部を応援する。準決勝あたりになるとさすが老練家、二十秒でもう出来上つてゐる。「つけ馬に煙草をせがむ辻となり」紫香氏の老巧さにはかなわない。斯くして優勝は竹莊氏、賞品はアベノ支部寄贈の衣装箱、奥さんに最も喜ばれる品である。愛論氏竹莊氏二人がかりでよいし／＼と重そうに持ち帰る一駒もあつて爆笑の内に相撲吟を終る。時に午後四時廊下の日当たりも悪くなつて会場はオーバーを着用するものもちらほら見えるのも歳末風景である。愈々貴山氏の席題の披露に入る。会場は再び厳肅に戻る。五客、三才と今日は賞品が渡されるので幹事は忙しい。文蝶氏の嫉妬は氏らしい名句、うがちの句をぬいて思わず爆笑する様な一幕もある。栗氏の立派な披露振り、豆秋氏も還暦の喜び

を満面にたゝえて披露される。最後は路郎氏沢山よい句がありますと、名句のかず／＼が読み上げられ、本年最後の不朽洞優勝カップは老練作家石井黙平氏が獲得された。午後四時三十分。

（木口賀峰記）

大会其の日の点描

☆久振りの屋の句会、庭の泉水の上を陽のかげりが走るのを視野の隅に入れないながら句作に師走のひと時を忘れる。

☆支部の忘年会のことを、珍らしくもすつかり失念して悠々歌舞伎座で新国劇を見ていたと云う先生の話に、これこそ忘年会にふさわしいと会場の喜ぶことしきり。

お富さんが街に雑音をふやした句や、机の上へ角を書いてみせる嫉妬の句に満場爆笑。表では句会案内に吊した提灯の底が風に吹き飛んで了つて、これが本場の底抜け騒ぎ。

☆参会者を三組に分けての雪月花句戦、雪組断然リードして進んだが最後の天位発表を残して、その差四点と月組が迫り天の句主が月から出れば同点と云う緊張場面がみられた。この日、元老黙平氏最初からひと声も出さず、いささか淋しそうだったのが最後の最後に不朽洞盃を獲得して忽ち春風たいう。

☆六時から会場をDへ移しての懇親会、年の瀬に廻らぬ首を長くして待つてゐる悠々たる急ぎ足で路郎先生。賛助会員愛二氏から麻生教信氏の由来をひとくさり、先生の喉と竹莊、潮花両氏の踊りを皮切りに続々秘芸が出てくる。阪急電車

第五回山陽新聞

讀者川柳大會

に休当りをくわして八十日余り静養して
いた水堂氏。養子代表に何かやれと云う
声に応じて「ヨウシ来た」と立上つた。
☆霞乃奥さんが、未だ誰にも見せたこと
がない踊りを披露すると云うので一同
きんちようすると、但しこれは正月句会
でやる初春封切予告と云うので、がつか
りしたり喜んだり。宴果てた師走の風は
少しつめたいが、人の心は温かつた。

――正本水客記――

兼題「夜警」

麻生路郎選

(人)この横町夜警も嫌な柳あり きさ子

(地)政変へ夜警が要らぬようになり 水客

(天)超然と夜警労資の中に立ち 黙平

兼題「雑音」

西尾栗選

(人)又一つ雑音ふやしたお富さん 一三夫

(地)雑音の気狂いじみて来た師走 ひか平

(天)雑音の中に育つて来て無口 杏花

兼題「終点」

須崎豆秋選

(人)終点を女は心細く降り 茶仏

(地)終点はどうにでもなれ赤い恋 凡九郎

(天)終点でお辞儀するのをつい忘れ 梅志

席題「嫉妬」

土井文蝶選

(人)茶のうまい朝の嫉妬がある火鉢 水客

(地)厚化粧手ぐすね引いている嫉妬 豆秋

(天)金のない亭主と知つて居ても嫉妬 一瓢

席題「若手」

友淵貴山選

(人)若手まだ恋の駄引知らなんだ 淡舟

(地)総入歯は若手の意見聞く 鮎美

(天)家元の機嫌損じた日の若手 久子

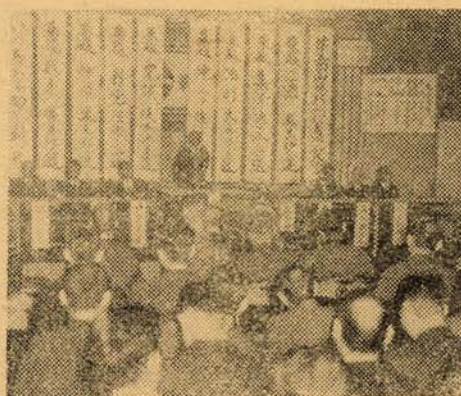
雪月花句戦「榮転」清水白柳子選

(人)榮転を母の強さに励まされ 葉光

(地)年賀状印刷出来て榮転し 古竹

(天)榮転を子の学校まで喋り 十悟

(以下各地柳壇に発表)



れ、満堂の柳人の目
を楽しませていた。
この他、霞乃先生、
山雨楼氏の色紙、路
郎師の書簡、銘々皿
、水府、紋太、久留
美、等先輩柳人の短
冊等も出品された。

前夜の六時岡山着で単身来岡された路
郎師は、出迎えの新聞社や、岡山支部の
風来子氏達と旅舎で、旅のつかれを忘
れて歓談されて一夜を明かされたが、最
近の激務の連続と、五時間の汽車旅のつ
かれが一度に出られたか、少しお加減が
悪いとの報告が、会場に一寸伝わつて、
一瞬不安な空気がたぎつたが、責任感
の強い師が、つとめて元氣を出されて会
場にお姿を出されたので、たちまち不安
は消えて、大会は高潮して来た。

しかもそのお体で、三十分以上にわた
つて、講演をされ、聴衆は全く魅せられ
た様に謹聴していたが、壇を下りられる
師に急激の拍手が浴せられた。深い感銘
をもつて、一人一人に植えつけられた柳
話、やがて各々の作句の上に生きてく
るであらう。

大会は席題の披露から始まり、路郎師
の兼題「酒」をもつてなごやかなうちに
閉会となつた。

旅舎に路郎師を送ると共に、県下各支
部の代表者十五名が集り、懇親会を開く
ことにしたのであるが、先生のつかれ
を心配して、師は床に寝て戴いたまゝと
し、枕元で開宴という、前代未聞の懇親
会となつた。いつまでも名残りはつきな
いものがあつたが、余りおそくなつては

益々御迷惑と午後九時散会した。
(延永忠美記)

兼題「酒」

麻生路郎選

(人)失恋の酒サービスが氣にさわり 昭三

(地)款項目には見当らぬ酒が出る 不諭

(天)酒もつて来いに保母さん冷汗をかき 千容

兼題「集金」

浜田久米雄選

(人)集金屋ウドンの腹でまた歩き 雨水

(地)集金がかどり母の足になり 一也

(天)集金の靴は斜めにちびたまゝ やす子

兼題「油断」

大森風来子選

(人)神様の油断さいせん皆取られ 今日坊

(地)産み落すまで知らなんだは油断 一策

(天)油断から来る天才のもう落目 曉弘

兼題「仲直り」

橋本晴の助選

(人)仲直り早速金を貸せと云う 今日坊

(地)仲直りして焦げ臭い飯を喰い 風来子

(天)仲直り神父の声を妻と聞き ゆり

兼題「冗談」

榎本聰夢選

(人)冗談じゃないよ僕には妻があり 秋芳

(地)冗談が真顔の鼻ではねかえり 一膳

(天)冗談を言つてもかどの立つ男 秀章

席題「新党」

服部十九平選

(人)新党へ重役会議寄付をきめ 禅一

(地)新党は麦を食えとはまだ言わず 素人

(天)新党のことに詳しいイヤリング (津山) 惠美子

席題「駈落ち」

逸見灯竿選

(人)駈落ちする荷と知らず手伝わ 句 醉

(地)駈落ちとも知らず愛犬つきまとい 日出夫

(天)引潮へ海岸沿いに駈落ちし 風来子

席題「財布」

福島鉄児選

(人)当分は養子に用のない財布 八ツ茶

(地)すりの眼を知らぬ財布のふくれう 久米雄

(天)無理をしたあとを財布もさみしう 正一

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼開催月日及場所記入▼締
切毎月二〇日▼投稿先本社宛

師走川柳大会 (本社)

十二月十二日 午後一時

於 光明寺

出席者 路郎・潮花・淡舟・文蝶・杏花
香林・ひか平・左文字・黙平・水客・春
翠・凡九郎・白水・多久志・一瓢・喜好
無魂・愛論・梅里・賀峰・ひろし・茶仏
葉光・句軒・根二・きさ子・操子・浩青
与呂志・秋窓・文秋・天真・久子・万葉
義広・三司・水堂・友三郎・古竹・晴芽
阿茶・一三夫・十悟・秋香・文夫・一朗
鮎美・牧人・成詩・梅志・生々庵・雅堂
いさむ・豆秋・静馬・京一様・一平・清
子・章子・登志子・都詩子・夢生・観月
比呂史・春果・竹荘・赤子・紫香・栗・
歌都路・杜的・貴山・彌三次・望峰・愛
二・葉平・信行・瑞川・圭圓・迷路・へ
とち・白柳子・蔑乃・梨里

兼題「夜警」 麻生路郎選

ガード下こゝだけ夜警無口なり 洛 醉
老夜警倉庫課長が頼りなし しげお
一ト廻り夜警は冷でグツと飲み 愛 論
火の用心を売りに来たよな子の夜警 逸 平
炭一つで夜警眠気と闘う気 句 軒

暖ばらいこれは夜警の護身術 一三夫
好きな酒飲めて夜警で不満なく 葉光
夜警ふと子の泣声に耳を立て 望 峯
夜警する身に色街の灯がゆれる 観 月
夜警どうしあくび移してすれ違い 赤 子
緊張の夜警電池を入れかえる 晴 芽
連火事へ夜警は少し寒くなり 春 果
俺とこの夜警の親父功四級 秋 香
孝行な夜警死目によろあわず しげお
有志から夜警へ届く炭俵 操 子
臆病な夜警は笛を握りしめ 杏 花
内職の妻へ夜警の靴が消え 杜 的
夜廻りの今のはただの音でなし 三 司
へいへいと夜警の注意聞きながし 香 林
首吊りときいて夜警はちと怯え 愛 論
茶瓶から夜警おしきせだけは飲み 文 蝶
夜廻りのくらやみの中であけ 文 蝶
ワンタン屋夜警へ愛想よく別れ ひか平
初発電車の音に夜警はホッとする きさ子
夜警して霜の重さを身に感じ 竹 荘
町内の夜警よく喰いよくしやべり 白柳子
異状なく明けて夜警に陽はうら、 春 翠
夜警の灯影を二つに引き離し 天 真
特種の記者に夜警は取りまかれ 赤 子
火の用心火の用心とさゝ機嫌 文 夫
うまい茶を入れて夜警は朝に 義 広
しんがりは六年生の夜警団 文 蝶
露路口で夜警チョン／＼叩いて 左 文 字
夜警ふと質の期限を思い出し 白 水
横町の方から夜警ひよりりと出 無 鬼
臨時夜警強そうなのについてゆき 梅 志
平穏な夜警へ愚痴が出はじめる 阿 茶
夜警まだ防空頭巾より捨てず 日 満
飄々と夜警のあとや先になり 梅 志
ひか平

兼題「雑音」

西尾

栗選

異状なし夜警のんきに基を囲み 竹 荘
夜警いま十二一重のように着る 句 軒
火を貸して夜警も探す落し物 紫 香
雑音の中で飲んでるニヒリスト 葉 光
雑音の中にも馬鹿とよく聴え 成 詩
大阪の雑音空からスビーカー 淡 舟
食堂の雑音一枚の皿で消え 秋 窓
雑音をリズムに街の子が育ち 十 悟
良縁へ近所雑音入れたがり 水 堂
雑音の中に孤独なサンドマン 杏 花
雑音／＼あゝ生き難き世なるかな 葉 平
雑音の中に生きてる風の月 同 子
雑音がラジオドラマをきか立させ 章 子
退院がまだ雑音になじみかね 久 子
雑音へつんぽになつて茶の点前 豆 秋
雑音をほゝ笑み返す肚も出来 香 林
雑音と言う事にして決をとる 白柳子
雑音も消えりや淋しい繁華街 句 軒
雑音は別荘にまでつきまとい 珂枝郎
三面に戯つて雑音がすまされず 豆 秋
雑音に馴れて働く湿しさ 左 文 字
雑音にしてかたづけける社長室 茶 仏
復興は雑音多い街となり 季 贊
雑音の中の私の靴の音 葉 平
雑音の中へ背伸びして雑音の中に 水 客
雑音の中で一算ビタリ合ひ 杜 的
雑音へ寒念仏も来て交り 一 瓢
街録の雑音さすがタリミナル 句 軒
雑音の厳しさみんな生きる音 寛 虚
終点に來てからすられたのがわかり 須崎豆秋選
秋 香

兼題「嫉妬」

土井文蝶選

いゝ夢が終点へ来て起される 淡 舟
ボーナスの不平終点までつづき 万 葉
終点の雨にやだれをそつとふき 清 子
今池の酒浜寺で起される 春 翠
終点で降りる気安さ寝てしまひ 凡九郎
終点の右も左もパチンコ屋 春 翠
車掌さんに頼んで終点まで眠り 淡 舟
終点で空いた／＼と喜ぶ子 古 竹
終点で夫婦とわかる二人連れ しげお
終点の喫茶へ這入る肩と肩 紫 香
終点の便所うしろで誰か待ち しげお
終点で起されて今何時だす 秋 香
終点でどつこいしよと坐つてみ 九里三
終点で聞けばわかるとうるさう 観 月
終点でそゝくさバンド締め直し 梅 志
人生の終点旗が着せてあり 香 林
終点で荷物の様に降される 季 贊
人生の終点噴火口に佇ち 紅 月
潮臭い風終点に近くなり 句 軒
終点へ蜜柑の皮が掃き出され 杏 花
終点へ近し電車へ麦が見え 秀 敏
終点でとう／＼闇米とられてい 一 平
終点で降りて婦人の連れになり 賀 峯
やきもちへ今日は機嫌をこつておき 無 鬼
もうれつに嫉妬したのが溝になりはじめ 文 秋
嫉妬とは別に案じる湯がたぎり 都 詩 子
新妻の嫉妬も知らぬ頼りなさ 雅 堂
嫉妬遂に青酸加里を用意する 淡 舟
あはらししいつぞとん／＼嫉妬いてゐる 愛 二
惚れてゐる証拠と嫉妬冷やかされ 赤 子
嫉妬する妻へ手土産出しそびれ 雅 堂
りんごむく指がふるえてくる嫉妬 友三郎

これですねんこ（アール）角を書き
泣く以外に涙くすべし片想い 比呂志
信用して居るも嫉妬して呉れず 淡舟
嫉妬の眼もう二三杯つづけてい 鮎美
ブツツリと切れた電話が嫉妬めき 紫香
しつけ糸取るに嫉妬の手がよる 春巢
たんまには嫉妬してもはし紅をつけ 文秋
嫉妬する母にむすめが味方せず ひろし
チョツリの妻の嫉妬もはしい年 文夫
惚れたと思いたくなく嫉妬して居る 生々庵
ふと軽い嫉妬が送る女客 紫香
一寸でも遅く帰れば鍵を閉め 賀峰
イヤリング小さい嫉妬のうしろ向き きさ子
遠くから猫が覗いて居る嫉妬 ひか平
嫉妬しているらしアローンのきつこ 梅里
裕福になつて嫉妬も少し止み 一平
振り上げた手のやりようがない嫉妬 ひか平
針の穴程の浮気に嫉妬され いさむ
引裂いておいて嫉妬はワツ泣き 文夫
捨てた娘に嫉妬の恐さ知らされる 同
爪弾がいつか嫉妬になる小唄 潮花

席題「若手」 友淵貴山選

もう対になつた若手に二目負け 十悟
無視出来ぬ意見を若手持つて居り 水堂
悔もなし若手にゆずり老の恋 義広
口笛も若手の自負を捨て居る 水堂
扇鶴がひつかき廻した大舞台 一三夫
夜になつて若手に頼む吐をきめ 鮎美
舌鋒に若手感激してしまひ ひか平
若手にはかないまへん去に仕度 天真
無理に無理重ねて若手へたはら 十悟
酔えば又裸踊りをする若手 紫香
二三人若手戻らぬ宿の床 同

若手だが老舗を守る如才なき 白水
劣等感若手の妓ちと寂し 生々庵
マルクスも読め若手は社を守り 雅堂
夏枯れを若手ばかりで蓋をあげ 梅里
色気まだ若手をしのぐ気で生きる 文秋
若手もう歌舞伎の世界あき足らず 雅堂
インタビュ若手案外無口なり 葉平
若手若手僕は老年組に入り 葉平
ちこなん居ても若手の巾を持ち 一瓢
禿げてゐるに若手向きか服屋云う 秋窓
若手だけ先に出しとけ俺は後 多久志
譲りたい若手が遂に見つからず 賀峰
町内の若手鉢巻きりしめ 葉平
異議の手がサツと若手から上り 春翠
純情な若手に女将の目がくるい ひろし
若手もういつか寛えた甘い汁 一三夫
革新の若手アブレの名を浴びて きさ子
え、等しやあれば若手のバリーじゃ 天真
善悪をはつきり若手させたがり 水客
雪月花句戦「榮転」 清水白柳子選

榮転を借金取りが先に知り 喜好
ライバルの榮転が不満袖カパー 久子
榮転の夜汽車なじみの灯にわかれ 凡九郎
御榮転肩を叩いて泣いてくれ 都詩子
榮転らしく送別もあり流される 愛二
榮転を嘆きつけて来た悪友 京一樓
榮転がにやりと一人おくれて来 梅志
榮転をしたよに見せた法の慈悲 瑞川
榮転は良し棧橋も夕焼ける 杏花
榮転が家賃払わず派手に発ち ひろし
榮転に売るには惜しい荷に困る 友三郎
榮転左遷つきの石も共に行く 葉平
榮転はしても月給同じです 秋香
お地藏さん拜んで榮転辻を折れ 水客

おしい人ばかり榮転してしまひ 文秋

川淀川支部句会（大阪市）

十二月九日 於 香林居 武部香林報

転宅を忘れ何時もの駅で降り 真一
忘れ得ぬ人を忘れと無理を言い 発中
勿体なくも御命日忘れる生活苦 六竜子
公約を忘れ代議士なぐり合ひ 文平
忘れたい過去へ無情な第三者 水堂
月給日子にしかられる忘れ物 花村
朝めしも抜いて腹立つ意志表示 多久志
やりくりを見せろはならぬ香を焚き 若菜
やりくりの果をも知らず客は酔い 礼三
宿替は書音の窓の景を襲め 香林

川堺支部句会（堺市）

十一月二十四日 於 摩天郎居 八木摩天郎報

内輪だけになつて幹事は酒を出し 好郎
内輪だけ密つて法事を無事すませ 狂二
内輪から買い手があつて開店日 貴山
屋根葺に親類の顔寄つて飲み 雄声
二階借日向ぼつこも屋根の上 雪山
あの屋根に当ればホームラン決め 冗歩
お西さんお東さんと京の屋根 摩天郎
見舞客水枕を替えて去に 南風郎
冗談も今日から云える水枕 春翠
愚案した顔は枕に支えられ 武助
刈り上げて枕冷たいものとする 春翠
寒がりと思ふがうまの合う火鉢 摩天郎
破れたらすくはる足袋へ母の愚痴 五句楽
女房のおしやれ四枚コハゼだけ 夕霧

川京都支部句会（京都市）

十一月十六日 於 仲源寺 大鶴喜由報

名曲のそれと聞かされ目をつむる 草之助
欄干へ片足掛けるまでのロケ 紅寿
割り切れぬまゝで仏へ手をあわせ 親生
落ち目とは与願の御手にすがりたし 鳥雀

十二月十六日

部屋中の煙の中に牌の音 鳥雀
部屋の名は万葉仮名の京の宿 幸男
二階の窓から雑音の見える部屋 晴芽
越年を捉えたストに苛立たし 光二郎
母に似たまつ毛でじつ聞き上手 晴芽
古い城跡いつも松風ゆき 古竹
夕陽さす古城に偲ぶ姫の恋 古竹
畑と化す土地もいくさで負けた城 亀一
枯蓮に隅のやぐらはまだ残り 紫蘭
戦争に出した綿まで思い出し 司郎

品質優良

タチカワペン先



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社

川 出雲支部句会 (出雲市)

十一月 於 図書館

尼 緑之助報

ニコソンの冬に備える釘を買い 章 坊
姉さんも母も妹も夜を編み 独 仙
デフレ／＼炭一俵を買っただけ 重 信
あれこれと月賦で買った冬仕度 柳 作
冬仕度した鶏は産み初め 朱 扇
ポーナスの見通しもなく冬仕度 梢 鳥
炬燵ごさのピラウかゝり居れず 岬 月
亥の日を調べる夜の熱いお茶 雲 平
新教育)と×とですむテスト 詩 朗
無事だった夫へ頬を埋めて泣き 代 男
荷になつて困る名物持ち歩き 緑之助
明日また来ない云々歯医者さん 加 緒
明日嫁ぐ娘を中に夕御飯 美 好
明日来る孫へ卵を売り残し 鳳 城
鎌を磨く背に夕焼が美しい 勉

川 日立櫻島支部句会 (大阪市)

十二月十七日 於 ひさみ居

丸尾潮花報

鳩山もいゝがデフレがつゞき 千代美
特売のとこだけ混んでいるデフレ 花 子
政界がどうあるとも世はデフレ 豊 子
デフレ／＼向いの店も戸をこさし よし子
デフレでも金魚は冬を越すつもり 花 美
デフレでも持つてくることはもつては 万 子
色へつぐ金もデフレの中から出 色 子
再婚をすゝめる人も母がなし 春 子
再婚の先も五人の子をかかえ 花 子
再婚を笑い遺産で喰うつもり 嘩 子
再婚を望むお方は妻があり はつ枝

倅な恋はこゝろにあるあいだ 千代美
花摘んだ日のある恋を想い出し 年 子
男なら呑んでみたいと云うデフレ 年 枝
若い腫の涙へ母の顔が浮く 沙智子
殺人をしたと思えぬ十九の腫 菊 母

川 鳥取支部句会 (鳥取市)

十一月十日 於 いすゞ販売店

大西八歩報

遺産分け内証の子まで顔を出し 三 歩
新調の靴を子供は床に置き 秀 和
ハイヒール八頭身を助長する 遊 星
文化の今日も弁当擧げて出る たかし
共稼ぎつらい休みの文化の日 三千代
文化勲章みんな明治の顔ばかり 天保鏡
文化の日旗だけ立てて手内職 耕 民
文化章あの世が近い人へやり 日 満
恋人に逢う約束の紅葉狩 敬 一
子が二人先にかけ行く紅葉茶屋 小 松
熊の出る話紅葉の谷深し 湖 山
紅葉狩よりも大事な魔法瓶 伯 山
頂上は仰いだ丈けの紅葉客 八 歩

十二月十日

気休めの希望も書かず職安所 愁 洞
パチンコの目は出ず腹はすく 陽 月
密告をして落選の気を晴し 日 満
引退をしたその後が気にかゝり 華 人
どこかには居るかも知れぬ福の神 芳 道
妻のスト風呂敷包みさげて出る 村 子
山ほどの希望に明ける新家庭 村 子

川 備前支部句会 (岡山県)

十月九日 於 吉永町役場

浜田久米雄報

うやむやを二次会へ持つて行き 運平子
また次の月賦にはげむ共稼 彌寿子
月賦でもよいと服屋は腰をすえ 詩 郎
妻と子と僕となつとくする月賦 久米雄
御祝儀が欲しいみこしに暴れられ 柳風子
心もだけの祝儀をうれしがり 東岸子
気前よく出した祝儀をこわられ 茂 樹
祝儀酒はめを外して嬉ばれ 半 仙
賛成の声にびつくり目をさまし 具詩雄
賛成はしたが会費は出ししふり 幸 子
晩酌の最中家計簿持ち出され 甘井子
晩酌が無口な父をしやべらせる 八千代
電源子はやり語で終りたし まさを
就職をきいて月賦を進めに来 娛句楽
簡素化は祝儀の事にもふれておき 浄 美

川 下関支部句会 (下関市)

十一月十四日 於 下関駅

石川侃流洞報

宮島の鹿も家族に入れて撮る 木陽子
連休の宿は隣も家族連れ 雪達磨
家族連れ商店街を見て歩き 仙柳堂
スローモーター有難かつた列車事故 ほんみ
兜など脱ぐかとへボの負け惜み 良 坊
戸締りを父がして出る家族連 土筆坊
家族連れ同志が出合う遊園地 蘇 人
負けた子がターザンの腕を思出し 伊三男
スローモーターの亭主の取りさう 仙 人
門戸張る修繕うちに廻りかね かうたる
家族連れたと見るをけして出かけ 侃流洞
スローモーターの一人(フランク)勝も 同
修繕に出せば買替すゝめられ 柳 慶
妻毎いもスローモーション並の地位 九呂平
修繕もきつちり妻の身だしなみ 司 棲

傘さした授業へ市議は目をつむり 十字星
ふと友を訪り氣になつた途中下車 成理智

十一月六日 於 原田商店

浜野奇童報

乗替えた満員バスで立ちつゞけ 迂 川
乗替を忘れる程のシャランが居て とも子
乗替えも落着いてる青切符 竹 影
乗替えて支線の訛耳につき 皿 水
乗替えた先発電車後になり すみを
乗替えて惜しい女と座が違ひ 稲 邨
乗替えてまだ奥へ行く薬売り 秀久坊
乗替えのホームで友を見失ひ 花 子
喧嘩腰で乗つて二駅乗りすごし 野 人
乗替えの荷物へスリも乗り替える 牛 歩
乗替える間話があつてけられ 龜 郎
家族連乗替えないバスを待ち 美能留
乗替えない汽車にする子沢山 萍 緑
乗替えを隣の客にたのんどき 流 風
乗替えを発車のベルがあわてさ 紫 陽
乗替えの略図を次の駅で見せ 富 至
乗替えの汽車が違つた発車ベル 笑 泉
乗替えへ四時間待つた山の駅 奇 童
乗替えてお国訛の箱でゆれ 巷 雨
乗替えは松葉杖から先に乗せ 大 戸
乗替えてほしい腰掛やつとこれ 溝 口
乗替えをあわてぬ程に旅になれ 鳥 石
乗替えない汽車選つて母に乗せ 久米女
乗替えてスリは静かな腫に変わり 弓削平
誤解よと妻慰めのお茶を入れ 麦 秋
席替えて誤解のとけた酒をくみ 古 心
兄妹と知らず女中は氣を利かせ 四 郎
誤解だとわかりマツチを軽うす 百 郎

川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼報

誤解から脊中合せの日は続き 騒人
内密も相談欄にだけはかき 一門
内密の話銚子を眼でおかせ 富至
お隣りのかども描いしく苦勞性 牛歩
苦勞性片付け役になまされる 遊子
苦勞性暢氣な友に腹がたち 三平
入院が口実になる十二月 正平
十二月残る日数を数えて見 鉄児
エブロンも汚れたまゝの十二月 七面山

引越しの荷厄介になる植木鉢 吉野
盆栽は夏の夜店で見とくだけ 三神
名人とおだてて一鉢せり取り 洋牛
一年生鉢植に名前ふら下げる 秋峯
鉢植に冬を知らせた銀杏の木 枝葉
家移りに大事の万年青折れて着 指月
鉢植の果樹店をふさいでゐ 秀水
賞状を添えて鉢植床に置き 左文字
伸びる芽を摘まれ鉢植いたわれ 白猫児
鉢植曰く俺も自由にして欲しい 無聖
二三日鉢植水を貰いすぎ ほか平
心境の変化鉢などいぢり出し 富女
気苦勞があるのか嫁の一吋やせ 文子
生活の苦勞を流す仕舞風呂 富女
苦勞して誤魔化したばマツチが出 喜天
骨のある奴とは知らず喧嘩売り 残玉
戦争の生めよふやせがこの苦勞 ほか平
猪口持てば女で苦勞した手つき 芋花
引伸す様に育てた子に死なれ 無鬼
嫁もろてやつても苦勞未だ続き 同
消炭をついで挨拶後になり 初穂
立志伝もと消炭で字を習ひ 芋花

川 赤坂支部句会 (岡山県)

一月三日 於 大介居

政田大介報

羊飼うブランをたてゝ年が明け ゆり
セコンドの音も嬉しい新ホーム 笑陽
左遷でも母のふるさとなら嬉し 宇柳
借金のお晴と知らず嬉しがり 貞川
表彰の子へ片親として涙 重坊
せきばらにして問題の事にふれ 水吞
難問へ煙草の灰が長うなり 雨水
興信所と判つて熱いお茶を出し 直人
信用が出来ない程の口上手 花蜂
信用をしていただけに腹が立ち 舟桑
身分証忘れて私服も疑われ 珍名
信用へ又公職の重荷が来 佳目夫
信用を受けてデフレも知らぬ店 苔石
亡き母にそつくりの人に席ゆき 土生
初恋の人に似ていてドキリとす 三四詩
初姿下駄が小石をはさみ込み 冬扇
初姿航空便で届けられ 光陽
灰へ書くフラシ火箸を分けて持ち 兼比羅
一本にも少し足らぬ貯金帳 青果
一本を二人で飲んだ寝正月 友月
一本になつて組合社をつぶし 素人
一本は幹事の為に除けた酒 直人

川 倉敷支部句会 (岡山県)

十二月十二日 於 観竜寺

田垣方大報

幼名で通信だけはまだ続け 流風

たど／＼しい母の便りが身にこたえ
合理化へ削りとられた通信費 越鳥
悪人も混つて寺の御縁日 千容
尼寺へ自由の風が吹く世なり 広志
お寺にも猛犬ありと書いてあり 千代春
寺男小店に酒の借りがあひ 麗水
およさない嫁で寺へもつて行き 一善
故郷へ錦を飾る寺の寄附 斜木
糸とりの日向へ菓子も運ばれる 耕水
独り者何んでも木綿糸でやり 素身郎
旦那もう金に糸目をつけぬ意地 方大
爪びきの糸に乗せたい咽喉もち 千容
糸吐いて吐いて蚕は世を捨てて 春也
アンコール義理でしたのに得意がり 一念
アンコールに歌詞を忘れた初舞台 峯豊
アンコールスリッパの腫が笑う 秀魁
アンコール二度まで効かず幕がおり 白楊
アンコール涙で受ける初舞台 日出雄
アンコール舞台の裏も泣いている 桂月
コンニャクと共に震える子が帰り 実穂
クリスマス法衣を脱いでワルツ踏む 春日
クリスマス云うにボートレース遅配です 愁水
ソリの鈴種々さまざまのレコード 盤明心
最悪の日となる七面鳥の群 鯉風
クリスマスイヴが見合の席となり 空頭
クリスマス外は小雪であるらしい 耕水
クリスマス牧師も芸に刈り出され 万古
クリスマスオールドナイトの娘を案じ 一善
偽病の風邪の見舞にちよつとこれ 天中
閉合せたゞの風邪ではないと知り 天風
風邪一つ引かぬ我子の素足を見 彌治郎
ウィンドへ風邪引きさうなニューモイド 五茶
妻の風邪里親がもう呼ばれてい 兼平
風邪引を氣力の足らぬせいにされ 聴牌

川 大原支部句会 (岡山県)

十一月 於 凡平居

本田恵二朗報

表面へ出さぬ帳簿の方で食い 十坊
表面も裏面もなくして親しまれ 凡平
歌うのは苦手手品で茶をにこし 恵二朗
口答えせぬが手応ない女房 一山
試験場みんな自信の顔に見え 真
どこへでも嫁くわと自信薄れ 地久平
鉛筆を噛み噛み自信のない入試 野川

川 大聖寺支部句会 (石川県)

十二月十二日 於 明石居

野村味平報

スタイルブックへ十代の悩み秘め 雅子
十代がよれば勝手な熱をふき 明石
優勝の記事で十代よみがえり 武富
よいとこへ来たと晩酌追加され 醉羊

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店
大萬
★大万川柳(第四十八回)を募る
兼題「指定席」路郎先生選
締切・二月十五日 句数五句以内
発表・二月二十一日(店内掲示)
授句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

晩酌の膳へ尖つた暮の声味平
晩酌の刺身は孫が来てつまみとよ
お立派なお方と母は先に惚れ素百々
何の彼のと呑む算段でだて上げ桃園
社会鍋出せば鍋まで盗まれた芳子
祭礼に買い損つた柄と会い光郎

川 宇部支部句会 (宇部市)

十二月十一日

国弘半休報

お隣のラジオもやっはり除夜の鐘半休
来年と今年を除夜の鐘がきめ雪達磨
丸まげを結わせた除夜もあつたのに
大者の闇は闇へ消えて行き万盛
かつぎ屋も大きく背負う年の暮
田植時闇屋予約をして帰り仙柳堂
闇米の倉でぬく／＼年を越し風柳
統制のうらに闇値の米があり峯朽
新らしい任地デスクの位置をかえ
少女にもある感傷の秋の暮千里
月組に少女ひしめく楽屋口雪峯
プロマイドかけて少女は夢を追ひ井蛙

川 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

アドルムは恋の未練を遮断する角正
世話役へ祝儀はずんだ嬉しい日耕文字
茶友達世話して呉れと父老いず清夢
世話好きにされ二次会へ残される遊子
会計へ世話役一寸気をきかせ十鳴子
結論が出ず常会の眠たい眼駄句案
女人夫まじえた焚火へ花が咲き迷調子
グッドバイ気安く言える仲さなり俊明
グッドバイ夜の女の片英語明朗

南海電鉄川柳会 (大阪市)

於 粉浜親和寮
友淵貴山報

美術展門下さくらになつて立ち好郎
失業の目に駅弁がうまき見え雄声
駅弁屋手すりに乗せて息を入れ賀峯
そら駅弁そらお茶幹事立つた賀峯
駅弁を買つて団体屋にする雄声
駅弁から隣りの人と口をきり雄峯
駅弁の試食駅長に届けられ鳥莊
駅弁屋発車ベルでも見逃さず一好
次が着くまで駅弁の日向ぼこ豆秋
駅弁は売れても軽そうに歩かず圭水
旅馴れて駅弁この駅に決め路郎

帝化川柳会 (大阪市)

十二月二十日

佐野白水報

鳴り止まぬ拍手へつゞく鐘三つ雅堂
弱身ある税吏フン／＼云つて去に白水
サンドマンだけは悠々暮の足京一樓
義理にする拍手内論音をたて三平
へそくりをうつつ紙屑箱へ捨て葉乙女
税金と娘に泣いた年の暮一平
ドラ猫は鍋まで喰べる様になめ乱酔
拾円の情が鍋の底で鳴り一朗
政党内弱身ばかりを探してい甲子朗
もう肉がかかぬ鍋の箸の先好裕
イヤリングついでダンサー鍋洗い春潮
盲目な恋すて手鍋揚げたがり寛峯
鍋のまゝ出せる親しさで纏い白洋
音羽屋へ拍手台詞がかき消され清童
慈善鍋一つ入れとくハイヒール頓平

川柳白鷺会 (大阪市)

檀南夏六報

鍋かき解け合う味の趣味に生き辰始
ワンマンも否決の拍手に色はなし恵撰子
磨かれてたゝかれて鍋も年を取り一星
御仏に近うなられしひとり言山風楼
ひと言猫がニヤーンと返事する一草
反抗がくすぶつてゐるひとり言おさむ
ひとり言女昔の好きな人一子
むつかしい顔の男のひとり言雄歩
想い出をくすぐる雲の匂いなり翻骨
宿命ががんにがらめになつたまゝおさむ
エレベーター一二三四と静かなり晴代
年相応に疑うこともなく淋し夏六
お風呂出て道路に出たら秋の風節子
鼻声になつてあわてる冬仕度おさむ
冬仕度めつきり目立つ若白髪二桂
冬仕度出ている雑誌は新年号博子
冬仕度せめて子のもの夫のものみどり
公園のソテツもほこ／＼冬仕度十三子

333 川柳会 (堺市)

十二月十九日 於 島野工業会議室
川村好郎報

五人振つて彼女の美しく満春
御同伴歓迎の灯に吸い込まれ好郎
相乗りの自転車始まる声を切り夕霧
五人探るに長蛇の列で待ち梅里
五人までは覚えてゐる見合満春
看板をはずせと酔いどれなつて雄声
風にくる／＼仕立物致します梅里
五人情夫を持つたことにされ摩太郎
五人よれば女か呑むはなし紋平

明和病院川柳青蛙会 (兵庫県)

山本九里三報

掛けても掛けても話中十二月元歩
十二月ストストストで暮れてゆき狂二
十二月他社のポナナス羨むだけ雪山
クリスマス親は手形で眠れや好郎
指揮権が女房にある十二月俊平
右借用右借用の十二月素男
十四でも落ちてゐないか十二月五句業
喰べて寝て喰べて寝て十二月同
猫だけが師走も知らず日向ぼこ夕霧
めい／＼に看板違ふビルの窓摩太郎
自転車会社へ勤めてゐるのにまたテクリ
パンクしてうめしく聞く始業ベル広平
老いてなお行く自転車の父淋し雪水
こんにちやよなら自転車盗られて梅里

コンクール思ふぬ賞に飛び上がり紫朗
ネオンサイン遠く眺めてランデブウ千年
指切りへ子供は小さな望みかけ恵水
郊外に住めばネオンにノスタルジヤ
すき焼で和解へ運ぶ酒を酌み鶏声
恢復期あの灯この灯がちらつき身素治
審査する気になつて観るコンクール白馬
友達と無一文になつて帰る月五月坊
ビルの灯が消えて電車の灯がさる羊一
すき焼を囲んで今日は無礼講水里
旅の空断断のならぬ露路をぬけ青一路
色街の裏にぼつたり質屋の灯里奴
夜景又良し神戸に住むときめ満秋
夜景なんかと慰勞会飲んで美奈
人間の馬鹿さを笑つて居るネオン
コンクールに夢あり秋のベレー帽九里三
指切りへ嘘を許さぬ子の真顔牧人



公・私・雑・記

★新春号は増刷したが、予想以上に好評だったので、働き甲斐のあつたことを欣んでいふ★なんと云つても雑誌は内容である★別報のように、川柳不朽洞会の理事長の交遊があつたが、生々庵は理事長は辞めても常任理事として新理事長を援けて行くことになつてゐるので不朽洞会の運営上何等支障は来たさないことを報告しておきたい。ムシロ身軽になつた生々庵の今後の働きが、会にとつてプラスになるものと予測すら行われてゐる。これからは支部の集いなどにも私の代りに出かけて貰えるので、私にとつても心強い訳である★新年には各地の柳人から沢山賀状をいただき御厚情を感謝してゐる★本年はいく／＼の企画が実行にうつされるので一層の発展を期待してゐる。何かと御支援をお願いする。(路)

不朽洞

会から

▼中島生々庵氏(大阪市)は二月十二日午前六時十五分からBK第二放送で「寝台」の選評をされる▼中島生々庵博士は一月元旦午後二時三休橋の

生々庵居で路郎氏夫妻を始め常任理事会員を招き新年祝賀宴を開催。不朽洞会万歳を唱へ飲を尽して散会楽しき集いであつた。▼中島生々庵理事長は戦後九年の久しきに亘つて本会の名理事長として本会をされ、其功績全員の認むるところ、殊に路郎師川柳生活五十年記念事業の貫達並に蔑乃女史の句集「福寿草」不朽洞会員句集「窓」の刊行計画も其の緒についたので健康上理事長の辞任を申し出られたので、常任理事會も種々協議の結果、理事長辞任を諒承することになつた。尤も今後は常任理事の一人として本会今後の運営に御活躍を願ふ事となつた。▼北川春樹博士は中島生々庵氏の後任理事長として路郎師並に中島前理事長の推薦により一月一日の常任理事會に於いて新理事長に就任猶一層本会の為め尽力される▼清水白柳子氏(常任理事)は玉造支部の外錦城新聞柳壇に活躍されてゐるが、今回、奈良県大神神社の依頼により同社発行「大和」に寄稿、同誌最初の川柳記事として一月一日号を飾られた。▼北川春樹博士(大阪市)は一月二日川維貴生川支部會に出席、テラプレコ1ダールを使用して句會後の宴會に再現、興味深き句會であつたと▼水谷鮎美氏(尼崎市)は今回阪神電鉄文化部から句集「柳むらさき」を刊行、創設以来の全社物故川柳家の靈に供する外、同氏二年

振の思い出句集として本会に寄せられた。なお全句集は三司、一夜夢生、悦郎、杏花等本会員の外同人の句一四九句収録されてゐる▼九尾潮花氏(大阪市)の肝煎で新春から本会に芸能部が設けられ、端唄、舞踊、謡曲等同志勧誘、なか／＼のハッキリ方である。天狗連は此際多数参加された▼野村味平氏(石川県)から新春号の最新な表紙、内容の充実、申し分なき編集振に寝正月も吹き飛んで新春らしい気分をの正月であつたと編集部にうれしかった▼三鴨美笑氏(米子市)から新春雑感「偶然の一致」として「失業」須崎豆秋選、「名士」三鴨美笑選の課題吟選者の連名が本名いづれも清次であるのは編集部のみならずか、偶然の一致かとのんびり春らしいたより、呵々▼小西無鬼氏(兵庫県)からの消息によると十二月十三日午後二時から岡野村小学校で婦人学級に川柳講座を開設、会員益々増加、川柳熱旺盛とのこと。因みに婦人学級は全校校長の主唱に係り社会、法律、家事、美容其の他社会生活に主婦の地位向上のため創設せられ目下会員九〇名の

由▼丸山弓削平氏(岡山県)は一月三日弓削高等学校で開催された県立高等学校事務職員協議会席上で柳話を試み多大の感銘を与えられた由▼阪田良坊博士(下関市)は十二月十八日福岡県志免町志免鉄道病院に於いて開催の九州医業学会に中国(各鉄道局)地方代表として出席十九日炭鉱も見学「寒さまた嬉し名物ふぐの味」の句信を寄せられた▼福島鉄児氏(岡山県)からの消息に依ると新年句會へ夕刊岡山、読売新聞新報社からカッポの寄贈を受け一同張り切つてゐる。なお、本年最初の計画として町村合併記念句集として「川柳町」の第二輯を三月一日刊行の予定、なお町からも助成金が下附されるとのこと▼土井文蝶氏(大阪市)は一月以降特別会員として旧に倍して本会のため尽くされることになつた。(摩)

新会員紹介

一月
清水望峰(大阪市)正
一瓢氏推薦
寒中御見舞
休温川柳會
貝塚市名越千石莊

小児科

平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

Printed in Japan

募集

課題吟募集

子沢山 (廿句) 水谷 鮎美選
寄附 (廿句) 逸見 灯竿選
(二月二十日締切)
エテクト
先輩 (廿句) 菊沢小松園選
(三月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽 雜詠廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 北川春樹選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▲「課題吟」は何人でも投句が出る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雜誌

第十二卷
定價 四〇円

(載轉禁)

昭和三十年一月廿五日印刷
昭和三十年二月一日発行

大坂市住吉區内方西五丁目二五番地
行發人 麻生幸二郎

發行所 川柳雜誌社

大坂市住吉區内方西五丁目二五番地
電話 住吉 六〇八一
電報掛 大坂 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 333

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧を忘れよう!



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠! 成分含量も多くてお得です

山之内

O.S.K のレディメード

株式會社 **大坂商店**

大阪市東区糸屋町一丁目
電話東區 一七四五番

大阪名菓
もなか氏のや
源氏いっしょや

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど 本舗
電話 三三〇九



蓬萊待つてねえと
今日も逢い 路郎

廣 楽 軒 理

蓬萊

大阪 なんば